
ARMORED CORE HIS ANSWER

Necho Nidus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE HIS ANSWER

【コード】

N8176Y

【作者名】

Necho Nidus

【あらすじ】

ARMORED CORE for ANSWER 虐殺ルート
のその後を妄想

クレイドルへの攻撃、そして撃墜。

企業に最悪の形で宣戦布告した首輪付き「ストレイドを肅清するために、企業は共同でアームズフォート部隊を新設した。

クレイドル防衛ノーマル部隊に所属していたトバイアス・ビーチャー少尉は、突然その部隊への配属を命じられ、地上へ降りる。

殺戮と破壊を繰り返すストレイドは、いつしか「獣」と呼ばれていたが、彼は本当に獣なのか、それとも……？

オリジナルキャラを交えつつ、その後のfAを書いています。

原作や設定資料集で明記されていないような設定がありますので、ご注意ください。

感想を頂ければ幸いです。

raven wood、pixivの同名で小説を投稿しております

Natural Enemy

彼女の50mほど前方で、巨大な爆発が起こる。時速1000キロで飛び回る死神から放たれた分裂ミサイル、SALINE05が前方の味方に直撃したのだ。プライマルアーマーが消し飛び、裸となったGA製の巨体に残ったミサイルが直撃する。数秒後には、半分吹き飛んだ単眼のカメラアイをこちらに向けた残骸が転がっていた。武器腕のバズーカが一本空を舞い、そのまま彼女の足下まで転がってきた。

「ローディーも落ちたか」

彼女、セレンは淡々とつぶやいた。これで4機目がやられたことになる。残った機体はセレンのシリエジオと、たった今GA最強のネクストを葬った男だけだ。男の愛機 - レイナードがその技術の全てを注ぎ込んだO3 - ALIYAHのフレームを使用した機体 - ヴィルトウを着地させる。金属の摩擦音と火花を散らしながら、流線型のフォルムがセレンの前に現れる。白を基調としたカラーリングをしたその機体は、ゆっくりとセレンへ向き直った。ヴィルトウの後方には、鮮血の代わりに火花とオイルを散らすフィードバック、GA最強だったネクストの死骸が横たわっている。空気抵抗を考慮して鋭く、そして流れるように設計されたアリーのフレームに、こびり付き振り返り血を見て、セレンは自らの目を疑った。統合制御体は何ら異常を訴えていない。シリエジオの光学センサは正常なのだ。そして一度瞬きするとその振り返り血は消えてしまった。

(怯えているのか、私が?)

修羅場を幾度となく経験してきたセレンだが、目の前の機体、い

や男にセレンは恐怖していた。

セレンが固まって動けずにいると、ヴィルトウの方が先に動いた。BFF製のライフル2挺が火を噴く。徹甲弾の群れがシリエジオに向かう。シリエジオは即座に右へとクイックブースト。コンデンサからエネルギーが解き放たれ、機体は右へと高速移動した。獲物を逃した徹甲弾は防衛用ノーマルの格納倉庫に次々と飛び込み、あっという間に破壊し尽くした。

だが弾丸は途切れることなくシリエジオを襲う。1発、シリエジオに弾丸が命中した。PAの物理干渉によって威力を減衰されつつも、緑色の障壁を突破した弾丸は機体に直接届く。右肩に被弾。セレンは連続被弾を避けるために後方、そして右へのクイックブーストを繰り返す。彼女は時速数百キロで空中を切り裂き、BFF製ライフル2挺の攻撃を辛うじて躲いている。そして凄まじい速度の中心FCSのロックオンのが終了、レールガンをヴィルトウに向けて放った。青い光とともに、電磁誘導によって弾丸が時速1万キロを越す速度で吐き出される。だが音を凌駕する速度の攻撃者は、ヴィルトウがいたはずの地面に大穴を穿つだけだった。

「バカな！ あれを避けるなど」

最強の兵器であるネクストとはいえ、搭乗者は人間である。その反射神経では数百メートル足らずの距離で発射されるレールガンを回避することは不可能、のはずであった。だが、ヴィルトウはシリエジオがレールガンを発射する直前に、左にクイックブーストしセレンの眼前から消えていたのだ。それは、シリエジオの攻撃を先読みした回避だった。セレンがその事実に気づくと同時に、右から徹甲弾の雨が降ってくる。ヴィルトウが宙を舞いながらライフルを連射しているのだ。装甲を貫くことに特化した徹甲弾でさえPAを前

にすれば1発では大したダメージを与えることはできないが、何発も浴びれば話は別だ。連続クイツクブーストと、レールガンの発射によってコンデンサ内の蓄積エネルギーが一時的に空になり硬直したシリエジオに、次々と徹甲弾が着弾する。硬直状態であるシリエジオは獰猛なタングステンの獣によって装甲を削り取られていく。いくつかはコアに直撃し、内部にいるセレンの肉体にまでその衝撃が直に届いた。

統合制御体からの警告を無視してその場にシリエジオは留まる。丸みを帯びたフレームに徹甲弾が突き刺さり、統合制御体からの損傷報告も激しさを増している。

そして突如、シリエジオはサイドブースタの噴射炎とともに右に旋回する。コンデンサにエネルギーが再充填されたのだ。風圧で足下の軍用トラックが紙のように舞った。ゆっくりと降下しているヴイルトウを即座にロックオンすると、レールガンを発射。だが、ヴイルトウは外壁の外へと降下し、レールガンはアルテリア・カーパルスの外壁に大穴を開けるだけだった。

(コンデンサへのエネルギー充填の時間と、その後の攻撃を予測していたというのか?)

セレンは呆然とする。アルテリア・カーパルスに「狂人」をおびき寄せ、最精鋭ネクスト部隊で撃破する。そういう作戦だった。オールドキングを撃破したまでは良かったが、「彼」によって次々にカールドランク上位のネクストは撃破されていった。彼女の育て上げたリンクスが、今や彼女と、世界を滅ぼそうとしている。

(なんとしても止めなければならん。あれは、強くなりすぎた。そして、その力の使い道を見つけてしまった)

彼との出会いを、セレンは忘れることは無いだろう。部屋の中で従順に研究員の指示を聞いていながら、目には反抗的な光を灯していた男。そんな男に興味を持ち、なんとか手に入れたあの日のことを。手に入れたはいいが、結局、リンクスであるセレンは彼にネクストの操縦技術を教え込むしか無かった。師匠として彼に戦闘技術をたたき込み、彼は凄まじい速度でネクストの操縦技術を会得していった。そして、彼の活躍を知ったORCA旅団からの誘いに乗り、彼は世界の敵となった。

それもいいだろう、そうセレンは思っていた。ORCAの理念に賛同した彼を今まで通りサポートするつもりだった。この計画を遂行することが、彼の生まれた意味なのだと、勝手に納得してしまっていたのかもしれない。だが、ORCA旅団として戦う彼の目にはまだ、無機質で気が狂いそうなほど生活感の無い「実験室」にいたときと同じように、光が灯っていたのだ。そして彼は今、人類の敵になろうとしている。

コンデンサのエネルギー充填が完了する。おそらくは彼も、ライフルのリロードを完了させている頃だろう。仕切り直しということだ。リーダーで彼の位置は把握できている。

「終わりにしよう。次で決める」

シリエジオの背部装甲が展開し、オーバード・ブースタのチャージが開始される。ジェネレーターとプライマルアーマーからコジマ粒子を吸収。チャージ終了と同時に、プラズマと化したコジマ粒子の噴射によって機体は急加速する。体に凄まじいGを感じながら、セレンは突撃する。アルテリア・カーパルスの外壁を時速1000キロで飛び越えると、海上に浮かぶ彼を視界に捉える。インテリオル

製のレーザーライフルとレールガンを連射。だが、赤い噴射炎を残してヴィルトウはセレンの眼前から消え去った。シリエジオはオーバード・ブースを切ると海面に降下する。プライマルアーマーの干渉で海面にクレーターが穿たれると同時に、左から徹甲弾の雨。即座に右、前とクイックブーストを連続で行い、クイックターンでヴィルトウを捉える。リーダーに紫色のマーク。シリエジオの前方にミサイルが接近していたのだ。ヴィルトウのロックオンを解除し、ミサイルに対してレーザーライフルを連射。一つの赤い光がミサイルを捉え、その場で爆発する。だがそのときにはヴィルトウはまたしてもロックオン範囲から消え去っている。

(素晴らしい戦い方だ。機動力で敵の側面を取り続ける。……だが
……)

再び左から徹甲弾が降り注ぎ、シリエジオの装甲は鈍い音を立てて形を変えていく。だがセレンは落ち着いていた。損害報告には目もくれず、彼女は左にいるヴィルトウに対して、右方向に向けてクイックターンを行った。プラズマの噴射とともに、シリエジオはヴィルトウに背を向ける。そしてシリエジオは、正面の誰もいない空中に向けてレーザーライフルとレールガンを構えた。

「側面を取った後に交差して、右を向いた敵の後ろを取る……お前の癖だったな」

セレンがつぶやき終わる頃には、シリエジオが右に旋回すると同時に、シリエジオの上を通り越した状態のヴィルトウに対するロックオンが終了していた。セレンは引き金を引く。

レールガンがヴィルトウのPAを突き破り、右腕に直撃する。レーザーライフルはコアのプライマルアーマー整波装置に直撃し、そ

れを消し飛ばした。セレンはこの好機を逃さず、一気に攻撃を畳みかける。レールガンとレーザーライフルの発射の度にコンデンサのエネルギーは食いつぶされていく。ヴィルトウは反転し、シリエジオにライフルで応戦してくきた。だが、レールガンがヴィルトウの右肘関節に直撃し、アクチュエータを損傷したヴィルトウの右腕はあらぬ方向にライフルを連射し始めた。そしてもう一つのBFF製のライフルにレーザーライフルが直撃し、銃口が消し飛ぶ。もうライフルは使えないだろう。だが最後に一発放たれたライフルの弾丸が、シリエジオの頭部のメインカメラに直撃した。PAによる減衰で破壊はされなかったが、機体と繋がるセレンは頭部にダメージを受け一瞬行動が停止する。

「メインカメラの損傷は軽微」その報告が出て彼女の視界が回復した時には、シリエジオの前方にミサイルが迫っていた。セレンに鳥肌が立つ。煙の尾を引きながら、ゆっくりと獲物を見据えてミサイルが前進している。だが彼女は、あえてミサイルに対して前進した。並のリンクスなら、ここでクイックブーストでミサイルから離れようとして、結局は全てのミサイルの直撃を受けただろう。そう、「全て」の。

前進したシリエジオの目前で、ヴィルトウのミサイル、SALINEO5は分裂した。8本の小型ミサイルが、シリエジオを覆い尽くす。だが旋回半径の内側に入ったシリエジオを捕らえることはできず、そのまま後方へと進んでいった。下手に離れるよりも、近づいた方が回避しやすいのがミサイルなのだ。だが、再びシリエジオの正面に接近するものがあつた。ヴィルトウである。その瞬間、セレンは自らが通常ブーストで「前進させられたこと」を理解した。

「クソッ！ ミサイルは誘導か」

ヴィルトウは、左腕に格納していたブレードを装備している。セレンが右方向にクイックブリストをするより速く、ヴィルトウはシリエジオに肉薄していた。赤い刃が最強の盾であるはずのプライマルアーマーを容易に切り裂き、セレンの搭乗している曲線で設計されているコアをも切り裂いた。ほぼ密着状態からの斬撃で、コアは深く切り裂かれる。火花と、爆発。シリエジオは重力に任せて海面に落下する。プライマルアーマーを失った巨人を、海面は先程とは別物のようにすぐさま飲み込んでいく。まだ生きている統合制御体が、リンクスの脱出を推奨している。かろうじて機体と繋がったままであるため、自分の体を直接セレンは見る事ができなかったが、彼女はもはや脱出する努力が無意味であることを悟っていた。断絶されかけているAMSで、海面からなんとか頭上の彼を視界に捉える。

「お前は、まだ憎んでいるのか？ ……ただ殺すだけでは、どうにもできないだろうに」

力が急速に抜けていき、セレンの声はかすれていた。この問いかけは彼に届いただろうか？ シリエジオは急速に海中に沈んでいく。セレンは、先ほどまでやかましくアラート音を鳴らしていた統合制御体からの脱出警報が段々と遠のいていくのを感じていた。彼は、セレンを静かに見下ろしていた。

「…………お前は、私のものだ。そうだろう…………？」

最後まで言い終わらないうちに、シリエジオは完全に海中に姿を消し、セレンの声も聞こえなくなった。

ヴィルトウは、しばらくセレンを飲み込んだ海面を見下ろしていたが、やがて何処かへと消えていった。

「人類種の天敵」と呼ばれる人間が誕生した瞬間であった。

To The Hell

「クレイドル07発、地上行きファーストクラスの便をご利用頂き誠にありがとうございます」

トバイアス・ビーチチャーが機内に乗り込んだとき、既に乗り込んでいた黒人がニヤケながらそんなことを言ってきた。彼は流し目でこちらを誘惑しようとしている全裸女性が表紙にデカデカと出された雑誌を持っている。黒人を呆れた顔で眺めながら、ビーチチャーは彼の隣に腰を下ろした。ファーストクラスらしく、ゴツゴツ堅い公園のベンチのような座り心地である。

「流石オーメル・サイエンス・テクノロジー社は違う。機内どころか客室乗務員のマヌケ面まで一流ときた」

ビーチチャーは荷物を輸送機の床に直接置くと、「ファーストクラス」の機内を眺めた。およそ搭乗者の快適性などを考慮していないような床と壁。同乗者はものを言わぬ布で包まれた補給物資と何人かのむさ苦しい男。そして今座っている椅子も歴史ある設計思想、「座れば良い」に基づいて作られたものである。男たちはビーチチャーを含めて皆着慣れたダーク・グレーのアーミージャケット姿である。

床には誰が読んでいたのだろうか、オーメルが発行している雑誌がいくつか散らばっていた。ビーチチャーは大して興味もないそれを拾ってページをめくる。隣で熱心に自分がマヌケ面ではないと主張する迷惑な同乗者を無視しながら、彼は軍用輸送機による数時間のフライトを過ごすことを決めた。

雑誌には、オーメル社の企業広告が丸々1ページを使って印刷されていた。インテリオルと共同で開発しているとされる新型AFのシルエットが浮かぶその広告は、オーメルの広報部が会心の出来だと太鼓判を押したという話だ。ページ左下には、「世界は更新される」というキャッチコピーが大きく打ち出されている。ビーチチャーはその文字に釘付けになってしまふ。まさに今、世界は更新されようとしているのかもしれないからだ。彼は自然と昨日の出来事を思い出していた。

クレイドル07の艦長から突如呼び出されたビーチチャーが艦長室に入ると、一目で高級品とわかるソファに、彼が数回ほどしか見たことのないクレイドル07の艦長と、見慣れぬ男が座っていた。兵舎では決してお目にかかることのできないような上質のスーツを来た白人男性である。彼は足を組み、ソファにゆったりと背中を預け、リラックスした表情でビーチチャーを眺めているが、恰幅の良い黒人である艦長は対照的に硬い表情で背筋を伸ばして座っていた。

「ビーチチャー少尉、ご苦労。座ってくれたまえ」

艦長に言われ、ビーチチャーはソファに腰を下ろす。艦長に倣って背筋を伸ばしたまま座ることにした。

「こちらは作戦本部のデブリン本部長だ」

「作戦本部のデブリンだ。よろしくビーチチャー少尉」

髪の毛がやや後退している白人男性、デブリン本部長が背中を起こし、にこやかに手を差し出す。

「お目にかかれて光栄です。本部長殿」

ビーチチャーもその手を握り返す。デブリンは顔に薄く笑みを浮かべている。デブリンは痩せ形の男で、その点では軍人であるビーチチャーや巨漢の艦長に比べて貧弱ではあるが、その眼光は獲物に狙いを付ける狩人のようにキラキラと光っていた。40半ばほどの年齢に見えるが、この年齢でオームルの作戦本部長になったのなら、幾多の権力闘争を勝ち抜いてきたのだろう。自らの力に対する自信が、顔つきに表れている。にこやかな笑顔は、敵対的な表情ではないのに他者を威圧するような凄みがあるのだ。

「呼び出しておいて悪いがね、少尉。私も忙しいので本題に入らせてもらうよ。……君はORCA旅団を知っているだろう？ 各地のアルテリア施設を襲撃し、クレイドル体制を崩壊させようと目論む反動勢力だ。」

「はい、存じております」

「では話が早い。企業はORCA旅団に対抗するために、企業連を通して共同戦線を張ろうと協議していた。我が社も積極的にその協議を行っていたんだよ。……ま、交渉はGAがギガベースを動かすことを拒否したり、インテリオルがイクリップスは2機までしか動かさないと言い出したりでまとまらなかったんだが……まあそれはいい」

他企業の話をしたときに少し口元を歪めながらデブリンは話していた。どこか小馬鹿にしたような口調に感じられたのは聞き間違ではないだろう。ビーチチャーは今朝、最低の気分で目覚めた後に垂れ流していたニュース番組の報道を思い出した。オーメルに不都合な報道などしないアナウンサーは、一貫して交渉でのG Aの態度を批判していた気がする。

「問題なのはここからだ少尉。交渉は難航しつつも、我々は彼らに對抗するためにA Fと違って自由に動かしやすいネクストを使った作戦を展開していた。その作戦はある程度の成果を挙げていたが、その矢先だ。前代未聞の事態が起こった」

デブリンの眼光が鋭くなる。ビーチチャーも話の異様な流れに思わず身を固くして続きを待つてしまう。ORCA旅団絡みの話だ。ハッピーなニュースでないことだけは間違いない。

「ORCA旅団がクレイドル03を襲撃した。奴らは、僅かな防衛部隊しかいないクレイドルを全て破壊し、1億人を虐殺した。……偉大なテロリストの誕生つてところだな」

ビーチチャーは絶句した。彼の言っていることが理解できなかつたからだ。クレイドル体制は歴史の浅い体制ではあるが、今まで試験運用中のクレイドルがテロリストに占拠されたことがあるだけで、外敵がクレイドルの攻撃に成功したことは無かつた。7000mという高度の壁と、僅かとはいえノーマル防衛部隊が展開しているためである。クレイドルを占拠することに成功したテロリストも、ネクストによって壊滅させられたという。ビーチチャーにとって、いや世界の人々にとって、クレイドルは盤石の揺りかごであり、汚染された大地から人類を保護する方舟であつたはずだつた。

「当然知らんだろう。まだ公表されていない。だが虐殺の規模が大きすぎてそのうち公表せざるを得なくなる。そんなに驚かなくても、きつと1週間後にはしみつたれた顔をしたテレビアナウンサーの報道を見て思う存分驚けるだろうさ」

そういつて自らデブリンはコップに水を注ぎ、大して美味そうでもなく飲み干す。コップの表面から水滴が一粒落ち、天然木を使用した机に放射状の水たまりを作った。その様を眺めていたピーチャーは片方の眉をつり上げたまま、視線をデブリンから艦長へと向ける。他人事のように「一大ニュース」を告げたデブリンと違い、艦長の目は真剣そのものだった。よく見れば少し汗をかいている。

その気持ちはピーチャーにもわかる。艦長はクレイドル07の運行を守る責任者である。他のクレイドルがネクストによって破壊され、地上に落ちたなどというニュースを聞けば、平常心でいられる方がおかしいだろう。そしてそれはピーチャーも同じだ。クレイドル防衛ノーマル部隊に所属する彼にとっても、ネクストがこのクレイドルを攻撃してくるかもしれないという恐怖は身を凍らせるに十分なものだった。そして何より、クレイドルには彼の家族だっているのだ。

「クレイドル03はエンジンを破壊されそのまま落下。当然生存者はなし。実行犯は、ORCA旅団に所属するリンクス2名。一人はオールドキングと名乗っている。もう一人は最近カライドに登録されたリンクスで、新人ながら大いに活躍していたようだよ。カライドのほうでの登録名は、『ストレイド』だそうだ。ふざけた奴だ。奴らはクレイドルを破壊後、行方をくらましていた」

深刻な話をしているデブリンの表情は、子供の悪戯を評価しているようなものだった。少しふざけるような表情と声色で、絶望的な

内容を語ってくる。真面目を具現化したような艦長は、そんなデブリンを横目で睨んでいるが、本社の重要な役職に就くデブリンに表立って抗議をすることはできないようだった。

「当然、我々も黙っているわけではない。なんとかこの二人を誘い出し、処分する作戦を行った。だが、こちらが差し向けたネクストは全滅。なんとかオールドキングは殺すことができたが、あとの一人、『ストレイド』はまだどこかに潜伏している。……そして、G Aとインテリオルがようやく重い腰を上げて、3社協同でAF部隊を新設してストレイドの処分に当たることになった。これはつい先日の決定でね。まだAF部隊に必要な物資やノーマル、MT、そして人材を用意できていないんだよ」

デブリンはそこまで言うと、机の上に置かれていた電子端末を取る。待機状態であったそれは、デブリンのコントロールによってすぐさま彼の目当てである画面を表示したようだ。軽快な電子音とともにページが開かれる。デブリンはちらりとビーカーを眺めると、電子端末に映し出された文章を読み上げる。

「『トバイアス・ビーカー少尉。クレイドル守備部隊のノーマル部隊長。敵ノーマルを多数撃破。ネクストとの交戦経験あり』、かその若さで、すばらしい腕だな少尉？ ネクストと交戦して生き残ったというのも素晴らしい」

自分の個人情報ファイルを見られていると、ビーカーは悟った。適当に謙遜の言葉を並べようとしたが、「ネクストとの交戦経験」という言葉がビーカーの頭の中から離れなくなり、結局うやむやに首を振るだけに終わってしまった。ビーカーはあの時の光景を思い出す。昔のことで、敵ネクストのカラーリングなど、よく思い出せないものも多い。だが、その時の経験をビーカーは忘れ

ることはないだろう。いや、忘れることができないのだ。

「我が社は新設するAF部隊に最高の人材を求めている。AFを運用するプロ、そしてノーマルを操るプロが必要だ。AFはそれ単体ではネクストに対抗することはできないからな。必ず防衛用のノーマルが必要だ。そこで、オーメル・サイエンスは君をAFノーマル部隊へ配属することを決定した。若い、実力は十分という判断だよ」

デブリンが美辞麗句を並べている。が、爪の間に入り込んだゴミを嫌そうな目で取りながら話されたのでは信憑性が全く無くなる。結局、ノーマル乗りの扱いなどこの程度のものなだと、ビーチャーは諦めていた。ネクスト、AFという二大兵器のサポート役、もしくは弱小勢力御用達の兵器、それがノーマルなのだ。

「各クレイドルの防衛戦力については、ノーマルを一時的に増やすことに対応する。君の抜けた穴もすぐに埋まるだろう。安心してくれて構わないよ？ さて、それで地上に降りた後は、すぐにAF部隊を編成し、作戦に参加してもらうことになるだろう。AF部隊の説明や作戦に関しては、AFの指揮官から説明を受けたまえ。今日中に君に正式に辞令が下るだろうが、今説明した方がいいと思っかね。出発は明日だ。それまでに、荷造りを済ませておきたまえ。…何か質問は？」

質問を受けるつもりは無いのだろう。デブリンはすでに端末の電源を切り、それを机に置いており、腕時計で時間を確認している。ビーチャーを見つめる表情は、「次の予定が詰まってるからさっさとしろ」と促しているように思えた。少し考えれば、本社の人間がわざわざノーマル乗りの隊長のためだけに直に足を運ぶはずがないということにはビーチャーでもわかる。ビーチャーを呼んだのは、艦

長への用事のついでだろう。オーメル関係者に支給されている携帯端末に辞令を送れば済む話だからだ。だがそれでも、ビーチャーは聞かすにはいられなかった。

「ネクストを相手にするなら、こちらもネクストを用いるべきではないかと思考しますが、どうなのでしょう？」

「こちらは一度最高のネクスト戦力をストレイドに対して使用したが、全て撃破されている。GAもインテリオルも、すぐさま次のネクストを正面からぶつけようと思うほど愚かではない。我が社も、オツツダルヴァをラインアークで失っているからネクスト戦力に余裕はないのでね。リンクスは、そうホイホイ代えがきかないんだよねえ」

「ノーマル乗りと違って」そんな続きの言葉が聞こえてきそうなねっとりとした声色でデブリンは語る。声色と対照的に、目つきは刺すようにビーチャーを睨み付けている。

確かに現在、オーメルはかつてのランク1であったオツツダルヴァを失ったため、カレードランク上位に専属リンクスを保有していない。だが、常々内外に向けてその実力の高さを喧伝しているランク12、リザイアが存在する。それにも関わらず、デブリンがさも「リンクスの品切れ」が起こったように語る理由は、ビーチャーでもわかる。温存したいのだろう。異例の事態が起こり、それにはきちんと対処しなければならぬ。だが、他企業の足はできるだけ引っ張り、自らは力を温存し、可能ならば勢力を伸ばす。それが国家解体戦争以来続いてきた企業の在り方であり、それを最も得意とするのが、オーメル・サイエンス・テクノロジー社であった。

他に質問は？ そう問うてくるデブリンの笑顔によるプレッシャ

「これ以上抗えず、ビーチャーは、「何もありません」と答えるしかなかった。

デブリンが満足した顔で別れの言葉を二人に送り、艦長室を出て行った後も、ビーチャーの表情は晴れなかった。高度7000mの清浄な空から、1時間も生身で出歩けば死が待ち受けている地上へ降りる。そんな過酷な命令であるにも関わらず、説明は簡単に済まされてしまったことも不満であったし、何よりクレイドルの防衛任務から外されるということが不満だった。

それでも、明日には荷造りを終えた姿で地上へ旅する軍用輸送機に乗り込まなくてはならないことをビーチャーは理解していた。クレイドル体制下では、企業に逆らうことなどできはしない。社畜、という言葉が身にしてみた。明日出発ならば、あまり時間はない。ビーチャーは艦長に敬礼すると、早々に兵舎に戻った。立ち去る間際、色々な感情が混ぜ合わさり、蠟人形のように不気味な顔つきになっていた艦長が目に入った。デブリンとどんな会話をしたらあんな表情になるのか、ただの軍人であるビーチャーにはわからなかった。

ビーチャーが輸送機のタラップから降りると、慌ただしい物資と人の波ができていた。大声で怒鳴りながら、物資を運び込むのを示す人間やら、どこからか運び込まれたノーマルを牽引する大型の車両。皆が皆、急ピッチで仕事をこなしているようだ。MTを運んでいる車両が同じように運ばれていた補給物資と激突しそうにな

り、周りの人間の怒号が聞こえる。ざつと見回しても、動きを止めてのんびりしているような人間は存在しないようだった。そしてそこから見えるのは、ビーチャーと同じ軍人だった。

それらが向かっているのは全て同じ目標物だった。数百mは離れているだろうに、ビーチャーはそれをはつきりと確認することができた。黄金色に塗装を施された巨体は、目の前で見上げれば要塞か山に見間違えるほどの威厳を持っているのだろう。四つの砲台は実弾を撃ち出すキャノンから、レーザー砲台へと換装されておりオームルの特徴が出ている。世界で最も普及しているAF、ランドクラブの改修型がビーチャーの配属される部隊の母艦であり、要塞であった。

軍用のジープがビーチャーと数名の仲間を迎えに来たので、それに乗り込むとジープはランドクラブへ向かって発進する。ノーマルの武装を荷台に積み込んでいる最中のトラックを追い越すと、ビーチャーは隣の黒人に声をかけた。

「オマー。オームルがランドクラブを購入したってのは本当だったんだな」

「みてーだな。ま、アルゼブラのハゲオヤジがオームルの女を買ってハーレム作るような時代だ。カニの1匹2匹くらいどーってことねーだろ」

マヌケ面の黒人、オマーは携帯端末をいじりながらぞんざいに答えた。最初からビーチャーはオマーからまともな返事が返ってくるとは思っていなかったが、彼をあまりに不憫に思ったのか、ジープを運転していたまだ若い青年がビーチャーの新たな会話相手になってくれた。

「少し前にG Aからランドクラブを鹵獲したみたいですよ。で、どうせ調べ尽くされているんなら売ってしまえ、とG Aが開き直ったという経緯だと噂されてますが」

「今回の件で企業もひとまず協力路線を採ることにしたみたいだからな。インテリオルには売ってもうちには今まで売らなかつたみたいだが、今回でそれも無くなったんだろう。G Aはうちの新型A F 建設計画を気にしてるって話だし、案外G Aも新型A F の開発計画をスタートさせたのかもしれない。旧型を売って金になるなら万々歳ってところか？」

オーメルとG Aの対立は深く、クレイドル体制が構築された後も互いに牽制を繰り返してきた。技術力でリードすることでオーメルはG Aを引き離そうとし、G AはA F の配備を進めることでオーメルグループの驚異に対抗していた。A F を自力では設計・建造していないオーメルがインテリオルと共同で新型A F 計画を打ち出したのは、G AのA F 部隊に対抗するためだというのがもっぱらの噂である。戦略や兵器の方向性が全く違う二つの企業の対立は、確実に地上の汚染を悪化させる一因だろう。だが今回の協調路線で、G Aもその態度を少しは軟化させたようであった。

「ま、なんにせよこれでG Aのデカブツが味方になつたんならありがたいですよ」

ジープのハンドルを片手で操りながら、青年――2等兵の階級章が見えた――は笑った。彼やビーチャーのような一般兵士にとって、G AのA F は恐ろしい相手である。オーメルの広報部は、G Aの兵器を「サイズもデカいが、欠点もデカい」「重武装のカンオケ」「堅いダンボール」と常口頃から罵っているが、その戦果から見ても

GAのAFは優秀である。

おおつぴらには語られることはないが、GAと経済戦争を繰り広げてきたオーメルの一般兵士たちはGAのAFを強敵とみなし、恐れている。優秀なネクストとリンクスが立ち向かえば話は別だが、こちらもAFをぶつけない限り、逆立ちしても勝てる相手ではないのだ。兵士の間では、「初めてグレートウォールを見たオーメルの兵士達が、丸一週間、轟音と共に発射されるガトリンググレネードの悪夢にうなされた」、という話がまことしやかに語られている。

そこまで畏怖されているGAのAFがひとまず味方になったのだから、兵士にとってこれほど心強いことはない。兵士の中には生でネクストの戦闘を見たことがない、という者も少なくはないので、AFは落ちることはないという認識が広く浸透しているのだ。だから現実を少しは理解しているピーチャーは、青年の笑みを肯定してやるように微笑むことにした。

（このデカブツが、広くて快適な死体安置所にならなきゃいいんだがな……）

どうしても、悲観的な思いを抱かざるを得なかった。長い間対立してきた企業らが、合同で対処しなければならぬ、と判断するほどのネクストとこれから戦おうというのだ。ネクストが戦場に現れからの歴史は短い、たった1体で企業を壊滅させたネクストがすでに2体歴史に名を残している。もしこれから戦う相手がそれほど相手であったとしたら？ ピーチャーの背筋が凍る。彼のようなただのノーマル乗りは生きては帰れないだろう。もちろん、AFとて無事では済まないはずだ。ネクストと戦う、ということがどれほど絶望的なのかわかっているのが一体何人いるのだろうか、ピーチャーは考えてしまう。

(せいぜい、祈ることにするか)

ジープからは一面の曇天が見える。ビーチチャーはその向こうにいるかもしれない存在に対して、久々に祈りを捧げることにした。

「君の要望通り、オーメルはA F部隊を動かすことを決定したよ。

……これで、交渉成立かい？」

デブリンの人を小馬鹿にしたような口調に対して、通信機からはノイズ混じりの返答が帰ってくるが、デブリンにしか聞こえないほどの音量だった。部屋にはデブリンしかおらず、暗い部屋の中で彼の声だけが響いている。

「……無論だとも。重役たちも、君らの理念を理解しておられる。

全ては、人類のため。そうだろう？　しかし、本当に君の作戦は成功するのかねえ？　君は奴がそこに現れるという前提で話しているようだが、もし現れなかったらどうするつもりなんだね？　軍を動かすのもタダじゃあないんだ。『戦果』というものが必要でねえ。軍を動かすだけ動かして、やっぱり現れませんでした。では困るんだがね？　……まあいい。君を信用するでしょう。……それは当然だ。安心してくれて構わんよ。オーメルは契約を必ず守る。それにこれは双方に利益のある内容だ。そちらはそちらの目的を達成でき、こちらにも損失はなく利益に繋がる。……実に理想的なビジネスだ

と思わんかね？ このビジネスが成立したのは、君らの実力を我が社の重役が非常に高く評価しているからでもあるんだよ。だからせいぜい頑張ってくれたまえ。……フン。例えそうだったとしても、君のような人間に言われる筋合いはないと思うがねえ？ ……わかった。では幸運を祈っているよ。……ああ、それでは」

短い電子音とともに、ノイズ混じりの音声も聞こえなくなる。通話の終了と同時に、デブリンはゆっくりと椅子の背もたれに寄りかかると、デスクの引き出しからウイスキーを取り出した。それをグラスに注ぐときの顔は、物乞いする乞食に縋り付かれたときのような忌々しげな表情だった。

「まったく。腹の立つ男だよ」

吐き捨てるように言うと、デブリンはグラスの中の液体を一息に飲み干した。アルコールを摂取した熱い息が彼の口から吐き出される。しばらくは鋭い目つきのままウイスキーを何杯か呷っていたが、やがて鼻を鳴らしてニヤリと笑うと、誰に言うでもなく呟いた。

「……ま、せいぜい頑張ってくれたまえよ、自動人形」

下界の人間を蔑む天使のような表情で、デブリンはまたグラスを傾けた。

Operation Destroy Ehrenberg

機材、物資、兵器の搬入。各ノーマル乗りに与えられた機体の点検、整備、動作チェック。そして部隊編成の確認。こんなことをしているうちに、ビーチャーの一日は終わっていた。スペースの問題であまり広いとは言えないランドクラブ内の食堂で食事を簡単に済ませ、ビーチャーは指定された士官用の個室でベッドに寝転がっていた。下士官用の個室の狭さに比べると大分マシではあるが、士官用の個室も快適とは言い難い。ビーチャーの寝転がるベッドもスペースの問題で二段ベッドであり、上の人間が寝返りをうてばベッド全体がきしむのだ。

おまけに、二段ベッドの上で飽きもせず携帯端末でロックを聴きながらエロ画像を収集しているオマーが、時折、「たまんねえぜ……」だのと呟くので、ビーチャーの機嫌は最悪だった。彼のヘッドフォンからは趣味の悪い金切り声を上げる男性シンガールの歌声が漏れ聞こえてきて、ビーチャーの快適な睡眠を妨害していた。

だからこそ、あんな懐かしい夢を見たのかもしれない。調子に乗っていた若造が現実を知ったときの夢を。

ビーチャーは翌日、寝汗を吸って素肌に張り付くシャツを見て、呆然とそう思ったのだった。

汚染によって生まれた砂漠。崩れかけたビル。苛つくほどの快晴。「平和」と名付けられた都市のなれの果て。そんな場所で開始された作戦は、若造にとっては大したことがないような任務に思えた。そのときの自分を、ビーチャーは散弾銃で吹き飛ばしてやりたくなる。どうして、普段よりもずっと無口になっていた隊長の様子に気

がつかなかったのか？ いつも面白くもないジョークを連発してビーチャーを辟易させていた巻き毛の白人が急にしおらしく神に祈りを捧げていたことを疑問に思わなかったのか？ 今となってはおかしなことばかりで、その場にいれば絶対に様子がおかしいことが気がついただろう。だが、当時の自分は自惚れていた。そして、その作戦で大きな代償を支払うことになるともしらずに、暢気にノーマルのFCSを起動させ、ブースタを噴かせて意気揚々と出撃していたのだ。

愚かだった。そうとしか言いようがない。その夢を見る度に、ビーチャーは自己嫌悪に陥る。若くて、考えが浅く、そして自信過剰な自分に嫌悪感を感じるのだ。「分相応な生き方」というものを作戦後に考えるようになってから、自己嫌悪は少しは収まった。ただ、大きな喪失感を時折感じるようになった。ノーマルの戦闘訓練中、部下への指導の最中、そしてクレイドル防衛という任務中。昔の自分だったら生き生きと動いていたような場面で、ビーチャーは喪失感を覚えていた。その理由はわからない。

時間が迫っていた。会議室への集合時間まであと10分もない。初日から遅刻なんてすれば、神経質そうな大男だった大佐に何をされるかわかったものではない。ビーチャーはハンガーかけておいたアーミー・ジャケットをそのまま羽織ると、急いで個室を出た。寝汗で湿りきったシャツの上から羽織るアーミー・ジャケットの感触はたまらなく気持ち悪かったが、我慢するしかなかった。

会議室では神経質そうなランドクラブ部隊の指揮官、メッツィイガー大佐が壇上に立ち薄暗い部屋の中で煌々と光と情報を放つスクリーンを前にして説明をしていた。彼は集まったAF部隊の面々を感情の読み取れない表情で眺めながら、淡々と作戦を語る。異様に低い声は会議室の空気を引き締めさせ、誰かが鼻をすする音さえしなくなつた中で響き渡つていた。

「企業連は、ORCA旅団が密かに建造していた衛星破壊砲の存在を確認した。場所はアフリカ南部、ルエー湖の畔だ。数は3つ。…これは、リンクス戦争中にレイレナードがGAの観測衛星を破壊しようとしたものと同型であり、その威力は折り紙付きだ。今回の作戦はこの衛星破壊砲の破壊を目的とする。奴らが何を考えているかはわからんが、わざわざ我々の目の着かない場所に建造したんだ。これが奴らにとって重要な意味を持つものであることは間違いない」

メッツィイガーが手元の端末を操作すると、スクリーンにはルエー湖の情報と、そこに至るまでのルートが示される。その青い光の道しるべの途中、シナイ半島あたりに存在する大きな赤丸は、ランドクラブを表しているようだ。メッツィイガーはレーザーポインタを取り出し、再び説明を続けた。

「我々はコロニー・アマルナまでまず進み、そこで補給を済ませる。その後、南下してルエー湖に向かう。敵もおそらく我々の動向には気がついていいるだろう。敵が防衛体制を完全に整える前に叩く。強行軍になるぞ」

シナイ半島で点滅していた赤丸は、コロニー・アマルナで一旦止まったあと、ルエー湖へと向かい、そこで点滅を続けている。AFの行軍はど派手である。城と見紛うほどの巨体が轟音とともに移動

するのだから、眠り姫でもベッドから飛び跳ねて起きるだろう。メツツイガーが強行軍になると言ったのは、ランドクラブがゆったりとした行軍をしていたら、敵もAFを配備する時間的な余裕が生まれてしまうからだ。ORCA旅団はAFを保有している可能性がある、という報道がなされていたのでそれを警戒しているのだ。敵AFの配備が終わる前にランドクラブの最大速度で一気に目標を叩くことが必要となる。

「無論、それでも敵は防衛戦力を用意してくるだろう。……おそろくはネクストだ。そのため、企業連もネクストの投入を決定した。カリードから2機、No.20 エイプルとNo.24 シリンジャーだ。コロニー・アマルナで合流している時間はないため、攻撃開始時刻に合わせてルエー湖より少し離れた合流ポイントにそれぞれ集結する。……ガキの遠足のように現地集合だ。コロニー・アマルナには本日23:00ごろに到着予定だ。そこから補給を済ませ次第出発する」

アルジェリアとジブラルタルからのルートがスクリーンに現れる。おそらくはネクストの空路での輸送ルートだろう。二つの出発地点はそれぞれインテリオルとGAの勢力圏でもある。その二つのルートと、ランドクラブの進行ルートを眺めながら、ピーチャーは驚きが隠せなかった。一つの作戦に、AFとネクストを2機投入というのは、なんとも豪華な面子である。20数機で世界を統治していた国家を破壊し尽くしたネクストと、そのネクストに対抗しうるAFを投入しようというのだ。味方ながら、その軍団の破壊力に鳥肌が立つのを感じると同時に、企業の必死さが感じられた。

「戦場では友軍のネクストが先行し、我々ランドクラブが後方から支援砲撃を行う。敵に接近を許した場合は護衛部隊で迎撃を行う。……やること自体はシンプルだ。単なる破壊任務だからな。こつち

にはAFとネクスト二機が付いている。護衛部隊は安心してランドクラブを守ってくれたまえ。説明は以上だ。誰か質問は……？」

メッツィガーの問いに、ビーチチャーの斜め前に座っていた男が手を挙げた。リバドという白人で、ビーチチャーの指揮する小隊に配属されている。メッツィガーが無言でリバドの質問を促すと、彼は落ち着いた声で話し始めた。

「敵の防衛戦力はおそらくネクストということですが、数は幾つですか？」

「それは蓋を開けない限りわからん。だが、ORCAのネクストは世界中に散らばって行動している。行動が目立たざるを得ないAFを使用するとはいえ、可能な限り情報を秘匿してきた。目標地点にORCAのネクストが勢揃い、ということは無いだろう」

メッツィガーは落ち着いた声で質問に答える。目標地点にすでに敵の防衛戦力が展開しているならば敵戦力の分析ができそうでもあるが、戦場から戦場を短時間で駆け巡り、そして死を押し売りしていくのがネクストだ。彼の言うとおり、何機のネクストが実際に現れるのかはそのときにならないとわからない。敵ネクストが世界各地で暴れている情報を下に予測を立てるしかないだろう。質問したリバドもそのことをわかっていたのか、特にメッツィガーに食いつくことなく黙ってしまった。彼も不安だったのかも知れない。

ネクストが編隊を組んでこちらに突っ込んできたことを想像したのか、会議室で座っている面々の顔は苦笑いか渋面だ。ORCAのネクストは精鋭揃いという噂だが、そんなものをまとめて何機も相手にすると言われたら何人が眠れぬ夜を過ごすことになるだろうか。

メッツィイガーが無言で次の質問を待っていると、今度は会議室の一番後ろから声上がる。ピーチャーのよく知る声で、それは遅刻して会議室に入ってきてメッツィイガーに1分ほど無言で睨み付けられていた人物でもある。今度も、メッツィイガーはその人物に対して冷たい目線を送っていた。

「えー、そのNo24のシ、シリンジャー？ってのはどこのどいつです？ 聞いたことないんですが」

少々特殊なスペルであるリンクスの名前に苦戦しながら、おずおずとオマーが質問する。丁度同じ事をピーチャーも思っていたところで、それは他の人間も同じであろう。軍人である以上、カロードに登録されたリンクスは全員把握しているのが普通だ。自分の味方として共に戦う可能性もあれば、その反対となる可能性もあるからだ。事実上オメール専属であるリザイアやかつてのオツツダルヴァのようなリンクスもいれば、完全に金で動く傭兵も存在するため、リンクスがどの企業を傭員にしているのかを知ることがそのままそのリンクスが敵か味方かを知ることになる。

「ORCA旅団の声明文が出される少し前にカロードに登録されたリンクスだ。オードーマツチでここまで順位を上げてきている。ドロン・カーネルの戦死に伴って新たに提供されたNSS計画の実験体と言ったところか」

「えーと……そいつは強いんですか？」

「……お前が確かめればいい。シリンジャーに向かってケツでも向けておけ。すぐにGA製の重火器で掘ってくれるだろうさ」

口角をにゅつとあげながらメッツィガーは笑う。仏頂面で押し通してきたからか、笑顔のほうか余程怖い表情になっていた。しかし軽口には素直に会議室の人間が笑い、バツが悪そうにオマーは黙った。

そんなオマーの様子には目もくれず、ビーチチャーは知らないリンクスのことを考えていた。GAがカロードに送り込んだネクストというならば、おそらくは重武装を施した機体であろう。かつてとは違い、最近ではGAのリンクスとネクストは質が上がってきている。NSS計画も、一人目の実験体はあっけなく戦死したというがフレームの性能は高いという話だ。人間側のAMS適正を弄ることでネクストの強化を図ろうとするオーメルに対して、GAは機体そのものをAMS適正の低い人間でも扱えるようなものにして強化を図っている。それならば、作戦に参加するというシリンジャーも頼もしい味方になるだろう。

そんなことを考えていると、後ろの方でオマーの声が聞こえた。本人は声量を落として隣にだけ話しかけようとしているつもりらしいが、普段爆音でロックを聴いているのが悪いのか、それとも口を止めることを知らないのが悪かったのか、その会話は丸聞こえだった。

「……なああんた。……NSS計画ってなんだか知ってるか？」

メッツィガーも聞こえていたのだろう。一瞬眉間に皺を寄せかけたのをビーチチャーは確認できた。だが相手にするだけ無駄と判断したのだろう。彼は何も言わずに次の質問を待ち、だれも質問が無いことを確認すると真一文字に結んでいた口を開いた。

「……では、作戦説明をこれで終了とする。各自、コロニー・アマ

ルナ到着までそれぞれの持ち場につけ。解散だ」

それを聞くと同時に会議室の人間が次々と立ち上がり、そして思い思いに雑談を始めながら部屋を出て行った。まるで魔法を解く合言葉のようだ。

ビーチャーも座り心地のよくはない会議室の椅子から立ち上がり、さっさと自室に引っ込もうと人の波の流れに乗ることにする。だが、会議室の出口で首をキョロキョロさせながらなにかを探しているようだったオマーが、ビーチャーと目があつた途端うれしそうに近寄ってきたのを見て、彼はため息を吐いた。

きつとこれからしばらくの時間をかけて、オマーにNSS計画について説明することになるのだらう。その苦勞を想像してか、ビーチャーはもう一度だけため息を吐いた。

旧エジプト領、コロニー・アマルナから進発したランドクラブ部隊は、見渡す限りの荒野を南下していた。国家解体戦争以前、政府による統治下においてもアフリカは内戦と貧困でまともな状態ではなかったとビーチャーは聞いていたが、少なくとも今よりは快適な土地だったことは間違いないだらうと感じていた。

リンクス戦争、そしてクレイドル体制下における経済戦争の影響でアフリカは変わった。人は骨に、都市は廃墟に、土地はただの荒

野になってしまったのだ。今では、重要な資源産出地を企業が管理し、幾つかのコロニーが細々とアフリカ人を収容しているだけだ。

オーメルから支給されたTYPE-DULAKEのコックピットで、ビーチャーはコジマセンサーに目を向けた。数値は、人間が生身で出歩くことを推奨できないレベルだった。企業のノーマルにはそれぞれコジマ汚染を防ぐ処置が施されているが、それでも緊張せざるを得ない。もし外気を吸い込めば、無視できない汚染が体に及ぶのだ。

「アベル・スリーより各機へ。どっこも異常なし。イカしたアフリカ美女はいない」

熱源センサー、光学センサー、コジマセンサーに目を凝らしているときに、緊張感の無い声がビーチャーの耳に入る。

「アベル・ツー、了解。こんなコジマ汚染だらけの荒野を出歩く女がいたとしたらそいつはイカれてるね。俺はコロニーのバーにいた女を帰ってから落とすさ」

「……アベル・ワンより各機へ。女のケツよりセンサーを見てろ。女とやるのは作戦後だ」

「了解」

ランドクラブは、普及型のAFとはいえ、各種装備は充実している。技術の向上で、十分な距離をランドクラブ単体で索敵することができるのだ。国家解体戦争前は複数の兵種を使用しなければならなかったらしいが、今はAFがあればほとんどのことはできてしまう。ノーマルはAFが苦手とする近接護衛と、遮蔽物に隠れる歩兵

や小型の機動兵器の索敵を担当するが、草木一本も生えない見渡す限りの荒野では、例えば土地勘のあるゲリラでも隠れることはしないだろう。

結局、ロクな仕事もなく哨戒任務を行うノーマル小隊の面々は、思い思いに雑談を始めるのだ。今の注意も、もう何回目かわからない。機動兵器の搭載総数が比較的少ないランドクラブでは、搭載されたノーマル小隊が交代で移動中のランドクラブの護衛を行う。交代時間ギリギリまでポーカールを行っていたこのアベル小隊は、ボロ負けをしていたオマーが負け惜しみを言いながらドレイクに乗り込んで護衛任務が始まった。それから、5分経つ毎にオマーが護衛任務終了までの時間を知らせてくれ、ポーカールでの復讐を宣言している。

「よし……よしよし。あと30分でアフリカ観光ツアーも終了だぜ。それで提案なんだが、次の勝負では全員マスクを付けながらやらねーか？」

ポーカールフェイスという言葉はオマーの辞書には載っていない。神が彼に試練を与えたとしか思えないレベルで、配られたカードを見たときのオマーの表情の変化はわかりやすい。ビーチチャーともう一人の小隊構成員、リバドはオマーをカモにして相当の利益を上げること成功していた。

カモの提案をあっさり却下しつつ、ビーチチャーは変わらず各種センサーにも気を配っている。オマーはどうだかわからないが、おそらくリバドもそうやってちゃんと気を配っているはずだ。見渡す限りの荒野でも、あつと言つ間にこちらの部隊に肉薄してくる存在を彼らは知っているからである。

ネクスト、恐怖の代名詞。ランドクラブが荒野を踏みしめながら前進していくにつれ、それとの戦闘の可能性が高まっていくと考えたと、ピーチャーも様々な感情を抱かざるを得ない。

「目標にも大分近づいてきている。いつ観光ツアーがモンスター・パニック映画になるともわからん。油断だけはするな」

「了解。それにしても、衛星破壊砲ですか。奴ら、結局は何がしたいんですかねえ？」

「……わからんさ。ただ、あまり俺たちにとって良いことではないってことはわかるがな」

今回の作戦目標、衛星破壊砲の存在はノーマル乗りの間で疑問だらけだった。企業統治下に世界が移行してから、観測衛星は数える程度しか存在していない。国家解体戦争による世界のゴミマ汚染進行によって、人工衛星の観測システムではまともに地上を観測できなくなったことが影響しているらしい。今では、三大企業が数機の人工衛星を保有しているだけで、その人工衛星もあまり軍事的に役立つとは言い難い。ORCA旅団が衛星破壊砲なんてものを持っている、それをこのタイミングになるまで察知できなかったことがそれを証明している。

考えられるのは、宇宙にある企業の所有物を破壊することで、自らの力を誇示すること。つまり、プロパガンダとしての攻撃が考えられる。だが、クレイドルを撃墜という最大級の「宣伝」を行った勢力が、これ以上宣伝目的で行動を起こすとはピーチャーには考えられなかった。今回の作戦は、色々と納得のいかない部分がある。それが小隊隊員にも不安という形で現れているのだ。誰だって、得体の知れないものには近づきたくない。

ビーチャーもリバドも、おそらくはオマーだって企業が100%の真実を公表しているわけではないことに気がついている。軍にいれば、理不尽な命令や意図不明の作戦を受け持つことがある。だが、それを深く追求したりするような人間は少ない。企業の秘密にはなるべく関わらず、そして従順に尻尾を振っておくのが、この世界で軍人として長く生き残るコツなのだ。

「政治や経済のことは、俺らノーマル乗りには関係ない。俺たちにとって今重要なのは……」

「ネクストと戦うハメになるかどうか。そうですね、隊長？」

通信越しでも、リバドの顔が「してやったり」という形を作っているのが想像できて、ビーチャーは苦笑した。

「そうだ。上の連中に好き勝手使われるのが俺らだが、上の連中は俺たちの命を貴重品とは思っていない」

「その通りで。だからこそ、自分の身は自分で守らないといけませんからねえ」

「それがわかってるんなら、くだらん雑談をしないで任務に必死になることだな」

「荒野の中からダイヤモンドでも探す任務ですか？ ノーマルごときに搭載されてるようなセンサーじゃあ砂鉄だって発見できるか怪しいもんです」

そう言っってリバドは、持っていたライフルで自らの機体の頭部を

軽く二回叩いた。そして、器用にもノーマルの体で肩をすくめてみせる。前にいた部隊で練習したのだろうか。その練習風景を想像してピーチャーはまたも苦笑いを漏らした。

実際のところ、ノーマルに搭載されているレーダーやセンサーは優秀だ。兵器としてのバランスを重視するローゼンタールが設計したTYPE-DULAKEにも、もちろん優秀なレーダーが搭載されている。ただ、兵器としての規模が違うAFや、ほぼ同じ大きさでありながらやはり規模の違うネクストのそれには敵わないというだけだ。

その後は、お互いに会話が途切れ、真面目に任務を行うことのできた。風景が荒れ果てた荒野からまったく変化しないようでは、雑談をする気力さえ無くなってくるというものだ。ただ、小隊長として部下に任務を遂行するように言っていたピーチャー自身が、この沈黙に耐えられなくなってきた。退屈からではない。くだらない雑談をしていないと、作戦に対する緊張が体からしみ出てくるのだ。案外、リバドが饒舌だったのはピーチャーと同じ理由かもしれないなかつた。

オマーも、このときばかりは黙りこくってしまったている。無理もない。AFとネクスト2機を投入する作戦。相手は史上最悪の反動勢力、ORCA旅団のネクストなのだ。これほどの大きな作戦にはピーチャーは参加したことはない。おそらくそれはランドクラブに乗って出撃命令を待つほとんどの軍人も同じだろう。

なにかこちらから話題を振ろうか。そう考えていたとき、沈黙を破ったのはランドクラブからの通信だった。目を向ける意味はないのについて通信機に目を向けてしまう。

「こちらランドクラブ。アルジェリアとジブラルタルのお姫様から連絡があった。どうやらトラブルが起こったらしい。お姫様は2機とも到着が遅れ遊ばす。時間は惜しいがランドクラブもここで一旦停止する。単機で向かうには危険だから」

「アベル・ワン、了解。引き続き護衛を続ける」

それだけの短いやりとりで通信は終了した。現在ランドクラブは、合流ポイントまではもう少しといった地点にいる。合流ポイントは、迅速に遂行されるべきであるこの作戦のために、ルエー湖に限界まで近い場所に設定されていた。と言っても、ネクストの速さで接近されても迎撃準備が整うくらいには離れた場所だ。

しばらくして、ランドクラブはその歩みを止めた。巨体が停止すると、その振動と轟音は阻むものが何も無い荒野に吸い込まれていく。ランドクラブの上部装甲に乗っていたビーチチャー達のドレイクは、バランスのおかげで振動の真上でも転倒することはなかったが、進軍の停止によって口は軽くなったようだった。

「一体どうしたってんだ。馬車がトカゲにでも戻ったってのか？」

「天候不良か、輸送機自体になにかあったのか。……どちらにせよ、俺たちは荒野からダイヤモンドを探す仕事に戻るしかなさそうだな」

ビーチチャーの軽口に、リバドとオマーが笑う。おそらく今頃ランドクラブのブリッジでは予定が狂ったことでこめかみをヒクつかせたメツツイガーが椅子に座っているだろうが、ビーチチャー達には戦いの前に緊張をほぐすいい時間だった。

「俺はダイヤモンドなんかよりももっとイイモノが欲しいねえ。そ

う、例えば――」

オマーが笑いを堪えながら話し出す。だが、ビーチチャーにはその続きがわかった。オマーが馬鹿丸出しの声で切り出すときはこんな話題に違いない。

「――女、だろ？ イカした黒人女なのか白人女なのか。それともアリサワ女なのかは知らんがな」

「……アリサワ女は嫌いだ。あいつら、簡単に股を開くってウワサだったのによ。実際は全然違うんだぜ！？　ありゃあ詐欺師だ」

ビーチチャーに先を言い当てられたからか、それともアリサワの女との苦い思い出が頭をよぎったからか、オマーの声は不満気だった。噂と言っても、国家解体戦争の遙か前から言われていたレベルのもので、そんなものを信じる人間がまだいたということにビーチチャーは呆れるよりむしろ感心してしまった。

「お前のことだ。どうせいきなり関係を迫ったん――」

オマーのくだらない話に付き合わされて、オマーをからかおうとした。そんな時だった。緊迫した声が通信から聞こえてきたのは。

「リーダーに敵反応！　場所はルエー湖。移動速度とコジマ粒子反応からしてお相手は敵ネクストだ！　総員、戦闘配置！　繰り返す、総員戦闘配置！　ノーマルとMT部隊はランドクラブを中心に展開しろ！」

先程の通信者と同じ相手だったが、軽口を挟む余裕も無い緊迫した声だった。ネクストという単語にビーチチャーはひやりと背中に流

れるものを感じたが、すぐさま小隊に指示を出し戦闘配置につかせる。

ブーストを軽く噴かしながら巨体から飛び降り、荒野へと降り立つ。後続の二機もそれに倣って着地すると、3機はそのままメインブースタから火を噴きながら荒野を滑っていく。

「急げ！ 敵が接近するのは一瞬だぞ！」

僚機はそれを言わずともビーチチャーの後ろをしつかりと追いかけてきていたから、もしかするとビーチチャーがそんなことを言ったのは自分を奮い立たせるためだったのかもしれない。

ランドクラブの側面にあるカーゴスペースが開け放たれ、次々とノーマルとMTが荒野へと降り立っていく。オーメル独自の改修で通常のランドクラブより数が増やされたカーゴスペースには十分な数の戦力を運用する能力があるとメッツィガーが説明していたが、それは本当だったようだ。

話で聞くよりも目で見た方がよくものを理解できる。ビーチチャーは自らの小隊を率いながら、同機種であるTYPE-DULAKEとMAMLUKの数をあらためて認識して驚いていた。これほどの数のノーマルは、クレイドルではついぞお目にかかることはなかった。高度7000mでは持ち込める戦力も運用できる戦力も限られていたし、なにより企業の方でクレイドルには敵を近づけないようにしていたからだ。

「セト小隊、展開完了！」

「レメク小隊、準備はOKだ！」

次々と小隊が配置についていき、威勢の良い声が通信から入ってくる。ビーチャーも小隊をランドクラブの右舷に展開し、MT部隊を囲むようにデルタ・フォーメーションを組む。同じフォーメーションを組んだ小隊がランドクラブの周りに展開しているのだ。

「アベル小隊、配置が完了した！」

ビーチャーも声を張り上げる。戦いの前に陰気な声で話されてはたまったものではない。ビーチャーは自分自身と、そしてランドクラブ全体の士気を上げるために精一杯力強い声を挙げた。

そして右手に持つライフルを目視で点検。次にライフルの弾倉、左手のブレードを確認していく。いつも通り、問題なく動く状態だった。万全の状態で戦える。

「こちらカイン・ワン、全機配置が完了したようだな。そのままの状態で待機しろ！ ……カイン・ワンよりランドクラブへ。敵は今どこにいる？」

聞こえてきた声はノーマル大隊の隊長だった。確か南欧系の男で、軍人らしい筋肉質な体と幾つもの皺が刻まれた顔をしていた。年齢の割に顔に皺が刻まれているのは、経験の深さを物語っているようだったことをビーチャーは覚えていた。

「こちらランドクラブ。敵はまだルエー湖にいる。今から全速力でこちらに来たとしても数百秒かかる！ こちらの迎撃態勢も十分整うだろう。」

そのとき、ゆっくりとした動きで、ランドクラブが動き始めた。

前後からランドクラブの「脚」が展開されているのだ。前後左右、この巨体でランドクラブが素早く動ける理由がこれである。前方に8本、後方に4本存在する脚は折りたたまれた状態から大地に突き立てられると、ランドクラブの巨体を支えて動き始めた。

ランドクラブ部隊の迎撃態勢は完了した。敵が近づいてきても万全の状態を迎撃を行うことができるだろう。ただし、万全の状態だからといってそれが敵にとって驚異に値するかはわからない。AFが撃沈される話は、ここ最近増えてきているのも事実だからだ。

「ついに……お出ましか」

「なあに、ちょっとスリリングなハエ叩きみたいなもんですよ」

そうふざけたリバドの声は固かった。だがビーチチャーはそれを笑うことはできない。この状況になって口の中がカラカラに乾いてしまったからだ。

小隊やランドクラブの間で行われる通信の他に、この戦場に音は存在しなかった。音を出すようなものが荒野には存在していなかったからだ、これが数分後には様々な音をまき散らすかもしれないのだ。それがビーチチャー達の勝利の雄叫びなのか、それとも断末魔の叫びなのか、それは――

「神のみぞ知る、ということか」

ビーチチャーは乾いた唇を舌で舐める。だが舐めた直後からまた乾いてしまう。コックピットは熱くないというのに、操縦桿は手汗にまみれていた。こんな状態では誰を笑うことができようか？

通信から、重々しいメツツイガーの声が聞こえてくる。

「ランドクラブより各員へ。友軍のネクストはもう少しで到着する。それまで耐えきればこちらのものだ。……奮闘を祈る」

少し耐えれば、ネクストがやってくる。それは短いが、ランドクラブ部隊に希望を与えるには十分な言葉だった。AFとネクスト、そしてノーマル大隊とMTの群れ。最強の機動兵器と、最強の巨大兵器。この二つが味方であるということの意味は、言葉以上の意味がある。

勝てる。その希望が部隊全体に広がっていくようにビーチチャーは考えた。敵はたった1機なのだ。それに対してこちらは万全の戦力を用意している。これで勝てなければ嘘だ。高度7000mから遠く離れたアフリカの大地で、ビーチチャーは初めて希望に触れた気がした。

だが、いつだって福音より試練を与え、希望より絶望を与えるのが好きなのが神だった。

「これは……ランドクラブより各機へ！ 新たな反応が……これは……ネクストだ！ ネクストの反応が……3機！ 繰り返す！ 新たにネクストが3機現れた！ ああ……神よ」

ほとんど絶叫に近い報告が通信機から聞こえてくる。現場が見えなくても、ブリッジにいる人間の顔が死体より青ざめている光景が容易に想像できる。それはビーチチャー自身も顔が凍りついているからだ。ネクストが3機？ 体中の神経が危険を感じて熱を失っているように感じる。ブリッジの通信士が報告を終えたあと、命令を伝達するための新たな通信もどこかの小隊からの軽口も聞こえなくな

ったのは、誰もが絶句したからだろう。

ネクストが、4機。それはなによりもわかりやすい宣告だった。つまり、神はこう仰っているのだ。「死ね」と。

死の臭いを嗅ぎつけてきたのか、汚染にまみれているアフリカでは珍しいことに、1羽のガラスが空を舞っていた。

H o u n d I t

H o u n d I t

三本の剣が、大地に突き刺さっている。防衛のためにその外周に配置されたハイレーザー砲台のおかげで、剣 - エーレンベルクは何かのモニュメントのようにも見える。太古の人々が、神に祈りを捧げ、そして祈ったモニュメントのようだ。

鈍い血の色をした眼でそれを眺めている者は、死神だった。白い鎧を纏い、両手には剣の代わりにライフル、両肩には弓の代わりに巨大なミサイルを搭載している。オーバード・ブーストでこのルエー湖までやってきてから、しばらくヴィルトウはエーレンベルクを眺めていた。

リーダーには、無数の敵反応。AMSと繋がったストレイドにはリーダーのデータが直接頭に流れ込んでいくのだ。ここからオーバード・ブーストで移動すれば数分で目標に到達できるはずだ。だが、彼は動かない。

人どころか、力尽きた草食動物の死骸も、それを貪る肉食動物さえいないアフリカの汚染された荒野に立つ白い死神は、そのモニュメントに祈りを捧げているようにも見えた。

神に赦しを請う子羊のように。聖戦に赴く戦士ののように。

その姿は、ただ単純に美しかった。獣は神に祈ることはあり得ない。では、この男はなんなのか？ 獣か、人か。神か、悪魔か。その姿は神話の世界を描いた絵画、と言われても納得してしまいたいそう

だ。

どれほどの時間が経っただろうか。ヴィルトウは、静かに向き直る。その方向にはレーダーの敵影が存在していた。AFと、その護衛部隊。派手なAFが動いているのだ。敵の戦力は既に承知しているのだろう。ヴィルトウの動きは緩慢だが、迷いが無い。

ストレイドはコックピットで、薄く笑いをこぼした。誰にも見られることのないその表情は、これから戦争を始める者のそれではない。それは、――狩りをする者の顔だった。

膝関節を曲げ、次ぎに来る衝撃に耐える動作を取る。コア背部が展開し、オーバーボード・ブースタが顔を覗かせる。狩りが、始まるうとしていた。

そのときだった。ヴィルトウのレーダーに3つの反応が検知され、統合制御体からの敵機接近警告が発せられたのは。

「これは……ランドクラブより各機へ！ 新たな反応が……これは……ネクストだ！ ネクストの反応が……3機！ 繰り返す！ 新たにネクストが3機現れた！ ああ……神よ」

ほとんど絶叫しながら通信士が報告している。その報告のせいか、ランドクラブのブリッジは水を打ったように静まりかえる。ネクストが3機も現れたのだ。その反応は当然であろう。だが、ブリッジの中でただ一人、この事態にも顔色を変えない男がいた。メッツィ

ガーである。

その灰色の瞳と同じように、なんの感情も感じさせない表情で指揮椅子に座る大男は、ブリッジをゆっくりと見渡している。メッツィガーの位置からは、面白いほどの百面相を見ることができた。目を見開いて固まる者、祈りを捧げ始める者、そして漏らしかける者。共通することは、皆こちらの敗北を信じ切った顔をしていることだった。

それらの顔は、メッツィガーにとって茶番にしか思えなかった。もちろん、この自体が茶番だと理解できているのはこの場では彼だけだっただろう。

メッツィガーは指揮椅子から立ち上がると、その口をゆっくりと開く。

「……リーダーをよく見ておけ。敵ネクストの反応を逐一報告せよ。それと対空ミサイルのセーフティを解除しておけ。ノーマル部隊はそのまま待機だ」

彼が指揮官として優れているのは、その声の使い方をよく心得ているからであった。特徴的な低い声を使って、静寂の中命令を出した。最初は呆然としていたブリッジの乗組員も、彼の声を聞くとはつとなりそれぞれの仕事に戻っていく。墓場のような静けさだったブリッジが、にわかに騒がしくなった。

まだショックから抜けきっていないのか、それとも突然我に返って慌てたのか、なんどももりながらもノーマル部隊に命令を伝達する通信士を横目で睨みながら、メッツィガーは指揮椅子に座り直す。

「敵ネクスト……こちらに向かつてきません！ ルー湖周辺に留まっただけです！」

報告した通信士が、その隣の通信士と顔を見合わせている。その他の乗組員も同様に、拍子抜けしたような顔をしている。

「敵がこちらに来なくともやることは同じだ。こちらに友軍のネクスト機が来る前に奴らの気が変わるとも限らん。それまでは気を抜くな」

今度は座ったままだ。それでもブリッジは再び各自がそれぞれの仕事に集中し始める。

メツツイガーはそんな乗組員の様子を見て、訓練不足だったかと苦々しい思いを抱きながらも、自分自身に苦笑してしまいそうになる。

通信士からの報告に、「当然だ」と返してしまいそうになったのだ。

「……私は役者には向かんようだな」

思わずこぼれた独白に、彼の隣で口を真一文字に引き締めて立っていた副官が、怪訝な顔を向けてくる。それを手で制しながら、メツツイガーはゆったりと椅子に背を預ける。

(さて、お手並み拝見といこう。私の手を煩わせるなよ?)

一つ大きな深呼吸をした後は、普段の彼らしく、無感動な灰色の

瞳で戦場を眺める軍人に戻っていた。

「……………本当に取引を受けてよかったのか？」

「仕方ないさ。テルミドールは既に死んだ。テルミドール無しでクローズプランを最終段階まで運んではいけない」

はつきりとした声色だが、どこか気怠げな印象を与える声に尋ねられ、ORCAの参謀、メルツエルはそう答えた。だが、会話の相手は不服そうに喉を鳴らす。

「それに、奴も裏切ったのだ。最高存在になり得る人間はもういない。そしてこのままでは奴の思うがまま世界は蹂躪されるだろう。企業の精鋭部隊は奴を始末できなかった。……………ならば、ORCAの最後の戦力で奴を倒すしかあるまい。宇宙への道を切り開けさえすれば、人類種を守ることができる」

「企業が残っていても、か？」

その言葉に、メルツエルはすぐさま返事を返さなかった。少しの沈黙が二人の間に降りた後、メルツエルは再び話出す。

「……………奴に世界を任せて文明すら破壊されるのを見るのがいいか。それとも企業に任せて宇宙へ飛び立つのがいいか。難しい選択だな。……………だが、どちらかを選ばなければならない」

「お前の選択は後者というわけだな。それでこの状況か。……まったく、きつい仕事を押しつける」

「そう言うな、銀翁。これが終われば少しは休める」

ネオニダスは、大げさにため息を吐く。対するメルツェルはどこか楽しげだ。彼らの会話は、連日の報道で世界に浸透しているORCA旅団のイメージとはかけ離れたものだった。

「それにしても、デブリンだったか。あの男、声にまで陰険さが染みついておったわ」

「奴は政治屋だ。毎日部屋で陰謀を巡らせていれば、陰険にもなるさ」

「……お前のようにか？」

「……そうだな」

メルツェルと、ネオニダスが同時に笑い出す。

どれほど笑っただろうか。やがてどちらかが満足して笑いを収めると、もう一人もそれに倣って笑うのを辞める。暫く沈黙が場を支配するが、そこに気まずさはない。もう何度も同じようなやりとりをし、そしてお互いを知り尽くしている。そんな空気だった。

「ふむ。今更聞くのもおかしいとは思うが……奴は本当に来るのか？　ただ殺したいだけの獣なら、掃射砲を守る意味も無かるのに」

「奴は来るさ。獲物を狩るだけの獣なら、テルミドールが負けるは

「ずがない。我々にとって掃射砲が重要であるように、奴にとっても掃射砲は重要な意味を持つはずだ」

「だからこそ、匣に使ったということか」

その言葉に、メルツェルは軽く鼻を鳴らすだけで応える。ネオニダスはそれで十分だったのか、話を続ける。

「しかし、奴の目論見は一体なんだ？ 虐殺をして、それでも宇宙への道を守ろうとする。その意味は？」

「……獣は、ただ殺す為に動く。だが奴は違う。成す為に殺しているのだ」

「ハッ。相変わらず、性格の悪い受け答えしかできん小僧だよ」

ネオニダスの言葉に、メルツェルは笑うだけだ。もっとも、そういう反応を返されることをわかった上での悪態だったのだろう。ネオニダスも笑っている。

「……奴は、『天使』たちと通じている可能性が高い」

それは、核心に近い言葉だったのだろうか。

ネオニダスが、思わず息を呑んだのだ。だが、年若い参謀にその様を気取られなくなかったのか、すぐにいつものくたびれた老兵に戻る。次に通信から聞こえてきた声は、動揺を感じさせないいつもの怠惰そうな声であった。

「そうか……『天使』ども、か。それなら、きな臭い話に違いない

だろうよ」

「ああ……だからこそ、こちらも奴を必ず止めなければならぬ」

「フン、お前の話のせいで余計にきつい仕事となったわ」

気怠げな口調の中、『天使』という言葉に大して忌々しそうにする響きが聞き取れたのは気のせいだろうか？ それきり、二人の会話は途絶えてしまった。最早話す必要は無いのだろう。

ネオニダスは呼吸をすることすら忘れたように、深く考え込んでいた。彼が何を思っているのかはわからない。だが、それが愉快な内容でないことは、眉間に寄っている皺の深さからわかる。

彼の眼は、まるで戦場にいるときのようにながら炎が宿っていた。常にその気怠げな態度を崩さないネオニダスであるが、その眼と表情こそ実験体時代、そしてアクアビット時代から戦い続けてきた老兵の顔だった。

どれほどの時間が経ったのであろうか。ネオニダスのその思考は、彼の意識に直接送り込まれる警告音によって遮られた。

>>FCS有効範囲に敵発見<<

統合制御体から送られてきた情報を感知すると、思考に没頭していたように見えた老兵はすぐさま全武装のセイフティーを解除した。彼の乗機、月輪の戦闘モードが起動していく。戦友のその対応の早さに負けぬ早さで、メルツェルも乗機であるオーブニングを戦闘モードに切り替えていく。

FCSは、掃射砲の横でこちらを見つめる白い獣をロックしていた。武装の有効範囲に入っていないため、白いロックマークで表示されている。

「さて、いよいよだ。我々は奴を確実に始末しなければならぬ。戦おう、人類の為に。……盛大にな」

「……御意……」

ネクストでルエー湖で移動している間、全く会話に参加しなかった真改が初めて口を開く。短く端的な、彼らしい返事であった。

遅れてネオニダスも返事を返す。なんと言ってるのかはよくわからない特徴的な気の抜けた声だが、それは肯定の返事なのだろう。

メルツェルは癖の強い自らの戦友たちの応答に、思わずその薄い唇を笑いの形に歪めた。

視界に捉えている白い獣に、大分近づいていた。このタイミングでオープニングの戦闘モード起動が終了した。続いて統合制御体が機体の最終確認を済ませていく。

>>武装セイフティー：解除<<

>>FCS：起動終了<<

>>ACS：異常なし<<

>>FRS：異常なし<<

>>最終チエツク、完了……<<

メルツエルは大きく息を吸い込む。機体にもその動きは反映され、オープニングはやや体を上に反らせた。空気抵抗が鋼鉄の皮膚に突き刺さり、メルツエルの触覚に激しく訴えかける。

統合制御体の言葉を待たず、武装を起動。武装の有効射程距離にはまだ入っていないが、肩のグレネードキャノンを展開。FCSでのロックオンを基に目視で照準を付ける。

・・獣と、目が合った。

>>コンバット・オープン戦闘開始<<

「……狩りの始まりだ」

二つの声とグレネードの発射音は、同時だった。

メルツエルの機体、オープニングの初手は有澤製のグレネードだった。轟音と共に打ち出された榴弾はヴィルトウへと真っ直ぐ近づいていき、そして着弾した。

鼓膜を破るほどの轟音と共に爆風が巻き起こり、放射状に大小の石と砂が吹き飛んでいく。そんな中に、メルツエル、ネオニダス、真改の三人は降り立った。立ち上がる爆炎を前にして、三人はそれぞれ油断なくレーダーで索敵を始める。この程度の攻撃で沈む相手

ではないとわかりきっているのだ。

暫く、戦場はただ天へと上る煙の音だけが響く。

そして、爆炎を切り裂いて白い獣が現れた。両手のアサルトライフルを連射しながら、一直線に狩人達に突進してくる。獣を前に、狩人達はそれぞれの方向へと散った。

だがヴィルトウはクイツクブーストを噴射。爆発的な加速で狩人の一人、月輪へと向かう。稲妻と見紛う突撃に、月輪のFCSは口ツクオンが間に合わない。月輪の目と鼻の先まで接近した獣は、だが獲物に牙を突き立てることなく、月輪の上を通過していった。

「……ッ！」

ネオニダスが息を飲む。獣がいなくなった月輪の眼前、そこには慣性の法則に従って凄まじい速度でこちらに向かってくるミサイルが存在していた。重量二脚である月輪に回避など間に合はずもなく、ミサイルの信管が作動する。

- - 轟音。重武装を施した重量二脚である月輪が、その衝撃でたたらを踏んだ。AC搭載型ミサイルとしては常識外れの爆発と衝撃だ。

それはMSACインターナショナル製、BIGSIoux。加速性能、総弾数を犠牲に、限界まで威力と爆発力を強化したラージミサイルだ。PAを持たないノーマルやMT相手では数機を一瞬で吹き飛ばすオーバーキルとなり、PAを持つネクストでさえもその一発は機体に深刻な爪痕を残す。だが、加速性能の低さから迎撃やフレアの散布が容易であるため、使用者が少ない下手物の兵器。 - -

それをストレイドは使いこなしていた。

加速度の低さを、クイックブーストによる超加速と、至近距離からの発射で補っているのだ。近距離戦闘を想定している03-AA LIAHのフレームだからこそできる芸当だろう。

ヴィルトウは爆音を聞くと同時に空中で反転、そして月輪に向けてクイックを噴射した。ブースタからはき出される噴射炎により超加速を得た獣は、致命傷を負った狩人に止めを刺しに行く。

「・・・そううまくはいかんよ」

老兵の呟きを聞いたのか、それとも獣の勘か。音速を越す速度で攻撃態勢に移っていた獣は、即座に右に回避運動を取った。

寸前までその白いフレームがあった空間を、雷が通り抜ける。

紙一重、である。

ヴィルトウは、勢いを殺しきれずに地面に着地すると、片膝を付きながら数十メートル先まで地面を抉り、やがて止まった。無茶な体勢からクイックブーストを行ったせいで、機体各所のACSとブースタの処理が間に合わなかったのだ。

「やれやれ、これ避けるとは。流石に一筋縄ではいかなあ」

気怠げな声を漏らしながら、ネオニダスは獣を見る。爆発の中から現れたのは、ほぼ無傷の月輪。

「お前さんと違って動きは遅いんだ。・・・ただ、プライマルアーマ

「と装甲には自信があるんでねえ」

掲げた左腕には、トールス製プラズマライフル、FLUORITEが獣を捉えている。

「ARGYROSと戦うのは初めてかい、お坊ちゃん？」

トールスがその技術を注ぎ込んで作ったネクスト、ARGYROSはネクストの防御に歴史を刻んだ機体だ。それまでのネクストは装甲は厚いがプライマルアーマー整波性能が低いもの、プライマルアーマーを重視し装甲が薄いもの、という二つの種類しか存在していなかったが、ARGYROSはその両立をコンセプトとしているからだ。

要塞のような防御力は、ラージミサイル一発ではびくともしない。煙の中から朧気に見えていた白銀の要塞のフォルムが段々と明確に見えていく。ラージミサイルの爆発でわずかに球体の形を損なっていたPAが、一瞬激しい音と光を放って、再び環流状態に戻った。その間、両者はお互いの隙を探すように相対している。

先に動いたのは月輪だ。

月輪がその左腕を掲げると、蒼白の閃光が再び獣に襲いかかる。しかし獣を捉えることなく地面にその威力全てが叩き付けられ、大穴が穿たれた。しかしネオニダスは命中を期待していない。――意識はその背後へと向けられている。

月輪の視界からかき消えたヴィルトウは、一瞬でその背後を取っていた。クイックブーストを連発する激しいドッグファイトだが、後ろへ回り込む動きは最小限の円運動である。

そしてむき出しの背中を刺そうとして、――しかしヴィルトウは自らの背後へと振り返ってライフルを連射した。

三度目の爆発。その正体は、静かに獣の背後に忍び寄っていたライジミサイル、BIGSIOUXだ。ストレイドが直前でその存在に気づき、信管を撃ち抜いたのだ。近距離での爆発にヴィルトウは雪崩のように周囲を飲み込もうとする爆炎にその姿を消す。

ヴィルトウの背後には、オープニングの姿。ストレイドが月輪に気を取られている隙に後ろを取っていたのだ。それは獣の動きを完全に読んだ、「戦術」である。

「ふむ……いい反応だ。目を潰しても背後からの攻撃に気がつくとはな」

淡々と呟くメルツェルは、どこか冷酷さを感じさせる口調である。どこまでも理詰めで、獣を狩ろうとしているのだろう。狩人一人では獣に敵わなくとも、複数で連携して当たれば万事間違いがないのだ。

ネクストの戦闘速度は、音速を軽く凌駕する速度となる。そんな戦闘速度で、目視とFCSだけで状況を把握できるリンクスはいない。AMSという、極めて直感的な操作で機体を操るシステムが存在しても、その戦闘速度からリンクスはデジタルな情報に頼らざるを得なくなる。統合制御体から提供される情報の一つ、レーダーがそれらの中で重要なものの一つだ。

コンマ何秒で変わる敵の方向、高度。自機の位置。――そしてミサイルの位置。レーダーからこれらの情報を判断し、光学センサと

併用して戦うことで、その戦闘速度でも混乱せずに戦えるのが一流のリンクスだ。

オープニングのレーダーは、今は砂嵐を映し出しているだけだ。それを見て彼がなんの驚きも示さないのは、これこそが彼の戦術だったからだ。

地面に直撃した月輪のプラズマライフル。

これこそがレーダーを狂わした原因であり、メルツェルの狙いであつた。プラズマライフルは、着弾地点を中心にECM空間を発生させる。つまり、ネクストにとって重要であるレーダーを無効化し、「目を潰す」ことになる。ストレイドは、その策に嵌ってしまったのだ。

ヴィルトウを飲み込んでいった爆炎が、翡翠色の障壁によって内側から破られていく。そしてその内側から、白いアリーヤがオープニングを睨んでいる。複数のカメラで構成される獣の目が、オープニングを突き刺していた。

近距離から爆発に巻き込まれたとはいえ、プライマルアーマーがあるため、端から見ると無傷のように見える。だがメルツェルは、万能とも言える翡翠色の障壁が歪な球形になっていることを見逃さなかつた。

おそらくPA整波装置に損傷を被つたのだろう。狩人と獣の殺し合いは、狩人が最初に相手に手傷を負わせることに成功したようだ。

表情の読み取れないはずの機械仕掛けの獣が、その複眼で構成されるカメラアイの光を一瞬強くした。特徴的な頭部カメラが、まる

で炎を宿したように鈍い紅に染まる。それはまるで、怒りを灯しているようである。もしくは、食糧として認識していた相手を、『敵』として認識した眼、であろうか。

体をやや前に屈め、獣は獲物の喉笛に飛びつくための跳躍姿勢を取る。クイツクブーストだ。爆発的な前進力があれば、ヴィルトウの戦闘距離に持ち込むことは容易である。

だが、狩人はどこまでも狡猾だった。

ヴィルトウの背後から、黒と白の対照的なカラーリングを施した機体が現れる。背中に装備された双発の追加ブースタが橙色の噴射炎を吐きだし、常識外れの速度をその機体に与えている。

「……………御免……………」

右腕には、一本のレーザーブレード。07-MOONLIGHTは、ネクストであろうとAFであろうと一刀で斬り捨てる業物だ。

- - 一閃。

迷いの無い太刀筋だ。PAなど最初から無かったように、研ぎ澄まされたエネルギーの刃がヴィルトウを切り裂く。

だが、直前で反応したヴィルトウの回避によって、白刃は獣の首でなく肩のミサイルコンテナを両断する。

スプリットムーンがヴィルトウと交差し、橙色の噴射炎と紫に染まった刀身が消え去ると、遅れて爆発が生じた。ミサイルコンテナが爆発したのだろう。灼熱の花を背景に、スプリットムーンはゆっ

くりと後ろへ振り返る。

爆発の中心から、大きく後ろに着地したのはヴィルトウだ。左肩に背負っていたはずのラージミサイルは消え去ってる。おそらく、爆発の直前にパージしたのだろう。そして機体の周りには翡翠色の障壁が未だ存在していたが、それは砂嵐のように細かくヴィルトウの周りを漂っている。至近距離での爆発を何度も受けたせいで、P Aが減衰しているのだ。

「鬼手仏心。……最期は一瞬だ。安心したまえ」

メルツェルは冷たく呟く。蒼い瞳は、冬の湖のように寒々しい。重量パーツばかりで構築されたオープニングが、地を這う獣を空から傲然と見下ろしていた。その姿はまるで盤上の駒を眺めながら次の手を考えるチェスプレイヤーのようだ。

そう、全ては盤上の駒なのだ。戦場という盤は、メルツェルが支配している。

彼の言葉を合図に、ネオニダスと真改は動き出す。相手の詰みを確信したかの様に、メルツェルは薄い笑いを零した。

H o u n d I t s

戦いは一方的だった。プラズマライフルによるE C Mでリーダーを潰し、グレネードとラージミサイルの爆発で視界を更に制限する。そして、圧倒的な突進力のスプリットムーンが切り込む。

戦術と、そして三機のネクストの連携が優れているからこそ実現する戦いだった。月輪、スプリットムーン、オープニング。三機全てが一糸乱れぬ連携で動いている。月輪の背後をヴィルトウに取られれば、即座にオープニングがライフルによる攻撃でヴィルトウを遠ざけ、ヴィルトウの得意な近距離戦闘の間合いにオープニングが入れば、スプリットムーンが斬撃を繰り出し間合いを遠ざける。

ヴィルトウはメルツェルによる戦術の前に、完全に攻撃を封じ込められていた。だが、ここまで防戦一方でありながら、致命的な一撃を受けていないことは驚嘆に値することであった。O R C Aの三機は、全てヴィルトウに致命傷を与えることができる攻撃手段を持っているが、それらを紙一重で躲し続けているのだ。

アフリカの大地は地平線の彼方まで建造物は無く、動物も、草木も生えていない。ただ大地にそびえ立つ3本の衛星掃射砲のみが、この戦いの観客だった。

一体何度目の攻防であろうか。月輪の放ったハイレーザーをP Aのわずかに右で回避したヴィルトウが、ライフルを放つ。だがノーマルやM T相手ならば一撃で機関部を破壊するようなネクスト用ライフルの弾丸であっても、月輪のP Aを貫くことはできない。翡翠色の障壁によって進入を拒絶されたタングステンの攻撃者は、そのまま行き場を無くして地面へと落ちていった。

月輪に正対しているヴィルトウの背後からスプリットムーンが突撃するも、その攻撃を予測済みであったヴィルトウはすでにそこにいない。

このような展開が先程から続いているのだ。

「カロード上位のリンクスでもこの攻撃には耐えられないと考えていたが……流石にテルミドールが認めるだけのことはある」

切れ長の目を細め、メルツェルは呟く。薄い唇を歪めながら忌々しげな表情を作っている。

「焦るな小僧。こちらが追い詰めておる。一撃でも当たればそれで終わりよ」

メルツェルほどの男を小僧呼びわりできる人間はそういないだろう。気怠げな声をかける人間は、そんな稀有な人間だった。

「いや……」

だが、策士の懸念は晴れない。自らも機体を操り、獣の狩りに参加しながらもその頭は素早く回転していた。盤上の駒をどう動かすか。そして敵はどのように考えて動いているか。それをネクストで戦闘を行いながら瞬時に判断できるのがメルツェルであった。

スプリットムーンがヴィルトウに正面から突っ込む。マシンガンの掃射をヴィルトウは冷静に地上を横に滑って躲いでいく。スプリットムーンが正面から突撃している間にヴィルトウの上を取った月輪がプラズマライフルとハイレーザをここぞとばかりに発射する

が、クイックで生じた緋色の噴射炎を残してヴィルトウは消え去っている。

三機の連携による攻撃で、ヴィルトウは変わらず防戦一方だ。ライフルの一発も発射できず、再び月輪からの攻撃をクイックで回避していた。

だが、メルツェルの顔はますます硬くなっていた。

「マシンガンはクイックで避けなかった？ ……まさか……いや……」

明晰な頭脳を最速で回転させながらも、メルツェルは自らの役割を忘れることはない。月輪からの攻撃を回避したことで完全にこちらに背中を向けたヴィルトウに向けて、ロックオンの完了したラージミサイルを発射する。そのときだった。

ヴィルトウがクイックを噴射し、独楽のようにその場で回転する。一瞬、オープニングのカメラ越しにそれと目が合ったとメルツェルが認識した直後に、彼の視界は紅に飲み込まれていた。

PAが蝕まれ、鋭角で構成されたフレームが熱によって損傷を受ける。遅れて統合制御体からの被害報告を受けたときに、ようやくメルツェルは何が起こったかを理解した。

爆発だ。ラージミサイルの信管を打ち抜かれて、オープニングの目前でミサイルが爆発したのだ。それはただのミサイル迎撃などではない。ヴィルトウの背後を取った状態で放ったミサイルを発射直後に迎撃されたのだ。

ヴィルトウは、メルツェルを援護するために月輪の放ったハイレーザーをクイックで回避してオーブニングの正面からは消え去っていた。

視界が貪欲な爆炎から解放され、メインカメラへの損傷報告を統合制御体から受けつつ、メルツェルはその薄い唇を血がにじむほどに噛む。

「間違いない。銀翁、真改、奴は……」

盤の異常にいち早くメルツェルは気がついた。だが、それでさえも遅すぎたのだ。蒼い瞳には、彼にしては珍しく驚愕と焦燥の情が浮かんでいる。そして、彼の言葉を聞き入れる前に、既に真改は動いていた。

ヴィルトウが大地に着地する、その瞬間を狙ったの突撃。迷いの一切を断ち切り、太刀の一閃に全てをかけて跳躍したスプリットムーンは、完全にヴィルトウの背後を取っている。クイックブーストでコンデンサ内のエネルギーが枯渇した状態で背後からの突撃。通常ならば「詰み」だ。そう、通常ならば。

「よせ、真改！」

真改が絶大な信頼を寄せる男の声は、彼に届かなかった。

音速すら突破したスプリットムーンの右腕から太刀が抜き放たれた。膨大なエネルギーの奔流はまさに月光だ。剣士は魔人の咆哮にも似た槌音を轟かせながら、ヴィルトウの背中に迫り、あと一歩。その間合いまで迫った。ヴィルトウの背部装甲が間近に見える。

斬撃が獣を捕らえる直前、獣が頭部を傾けて少しだけ、ほんの少しだけ、後ろを見ていた。

刹那、獣を守っていた翡翠色の障壁が目に見えるほど膨張していき、そして弾けた。神々しく、そして禍々しい翡翠色の爆発。ヴィルトゥに密着するほど近づいていたスプリットムーンは、その輝きに飲み込まれていった。

強固に機体を守っていたスプリットムーンのPAは天界の曙光を浴びた魔物のように消失し、そして閃光が機体を包み、破壊を実行していく。爆発的な速度で前進していたスプリットムーンは、閃光によりその前進を止め、そして圧倒的な力の奔流に後ろへ吹き飛ばされた。

無様に転倒しなかったのは、運か、意地か。

閃光が収まったとき、いつの間にか真改に正対していた獣が獰猛な瞳を獲物に向けていた。

アサルトアーマー。本来ならばPAとして機体周囲を環流しているコジマ粒子を攻撃に転用する最新技術だ。コジマ粒子による急速な周辺汚染の影響で、ネクストのPAでさえも中和されてしまふ。

だが、アサルトアーマーは発動に若干のタイムラグがある。それを高速で接近するネクスト相手に直撃させたというのは……

「全ての攻撃を読み切っていた。ということか……」

呻くようにメルツェルは呟く。

3体のネクストを相手取り、全ての攻撃を紙一重で躲し続け、後からの攻撃さえも読み切ってカウンターを仕掛ける。そんなことができるのは……化物だけだ。

スプリットチームはすぐには行動を再開できない。まともにアサルトアーマーの直撃を受けたその体は装甲が所々剥がれ、内部まで挟られている。カメラアイも半分が消失しており、まともな視界を確保できない状態であろう。機体各所のFRSも深刻な損傷を受けているに違い無い。

そして無防備な姿を晒した獲物の前には、牙を研ぐ獣だ。PAの消失した体は、牙を突き立てれば容易に破壊し尽くすことができるだろう。

メルツェルの位置からでは、真改の援護は間に合わない。獣が一人の剣士を鉄屑に変えようと両腕を掲げ、その銃口を向ける。

「 やれやれ、なんとか間に合ったか 」

ストレイドの頭上、アサルトアーマーによるコジマ汚染の届かない空中には、どんな状況でも変わらぬ気怠げな声を呟く男がいた。

味方機同士の秘匿回線だ。それがストレイドに聞こえたわけではないだろうが、それでも獣は隙をさらけ出した剣士から上空の老兵へと視線を移す。

獣が老兵を視界に捉えたときには、戦場を見下ろしていた月輪は自らの背中に搭載された武装、後光と見紛うようなフォルムのLETHALDORSEを攻撃形態へ移行させていた。

白銀の戦士から翡翠色の粒子が膨張していく様は、病的な美しさがある。

膨張が収束し、一瞬の静寂。そして直後に放たれたのは、致死量の閃光だ。禍々しい輝きの圧縮されたコジマ粒子の固まりが、獣へと迫る。アサルトキャノンの直撃は、即ち消滅を意味する。

ネオニダスはFCSを即座に使用して両腕の武装へ命令を伝達。アサルトキャノンが回避されても敵を即座にロックオンし、高出力のエネルギー兵器で焼き払えるように獣を注視した。

だが、獣はクイックを噴射しない。代わりに背部装甲が展開し、姿を現したオーバードブースタに命が吹き込まれ、直後に獣は突撃した。

ネオニダスは瞠目する。

ジェネレータから発生させたコジマ粒子を全てオーバードブーストに回したのだろう。PAすら満足に回復していない丸裸の状態で、破壊の権化である閃光へと獣は突き進んでいく。

正気の沙汰とは思えぬ行動に、老兵はらしくもない驚愕を覚えた。

紙一重だ。ヴィルトウの肩をかすめ、その装甲を食いちぎって閃光は地面へと着弾した。地面に広がっていく翡翠色の爆発は、文字通り致死量の毒と光である。

「……やりおる。だが、それほど前進してはもうコンデンサは空だろっ？」

戦場での動揺は死に繋がる。即座に冷静な判断を取り戻した老兵は脊髄から直接の命令を下した。月輪はFCSからの命令を忠実に実行し、両腕の武装を使用。二本の白い熱線が放たれる。

獣の間合いに入られれば喉笛を食いちぎられるだけだ。彼我の距離が開いているうちに攻撃を畳みかける。月輪は再びの射撃。合計で四本の熱線が放たれた。

オーバードブーストによる爆発的な前進は、同時にコンデンサに貯蓄されたエネルギーを食いつぶす。今のヴィルトウにはクイックを行うだけのエネルギーは残されていない。老兵の読み通りだった。

精確なロックオンによって放たれた熱線の軌跡を眺めながら、ネオニダスは勝利を確信する。4本の熱線を浴び、無残に爆発四散する機体の姿がイメージできるほど、完璧な攻撃であった。

その時、獣は機体に搭載されたサイドブースタを軽く噴かし、機体を90度回転させる。

その直後、ヴィルトウの体を挟むようにして、熱線が通り抜けた。

あと少しでも横にずれていたなら、熱線が白い装甲を抉っただろう。皮一枚、それほどの距離だった。

老兵はこの戦いで初めて、背中に冷たい汗を流した。一瞬で冷えた体には鳥肌が一齐に立つが、直後には体が内部から熱を噴き出し一気に体温が上昇していく。

勝利を確信した攻撃。敵のエネルギー残量を計算し、回避不能と判断した攻撃。それをこの化物は、サイドブースタを一瞬噴かし最小限の動きで回避したのだ。

トーラス自慢のエネルギー武装は、掠っただけでもその威力は十分すぎる代物だ。それをPAの無い丸裸の状態で、薄皮一枚焼かれる程の距離で回避する。それは、人間や獣の芸当ではない。

「貴様、一体何者だ……！」

恐慌状態に陥りそうになる精神を辛うじて繋ぎ止めると、ネオニダスはなんとかそれだけを呟く。いや、呟かざるを得なかった。その表情は痙攣を起こしかけているように震えていた。

ヴィルトウの突進は止まらない。

残された二つの熱線が、今度こそヴィルトウを焼き尽くそうと迫る。

一瞬の交差が、永遠のように思える。ネオニダスは自らの鼓動すら地響きのように聞こえた。

一斉に発射せず、間隔を少し開けて発射した二本の熱線はそれぞれ僅かに異なる軌道でヴィルトウに迫っていた。それを前にヴィルトウは再びサイドブースタを一瞬使用しただけだ。

右。そして左。

ほんの僅かに左右に動いただけ。ただそれだけで、プラズマとハイレーザーはその圧縮された力をヴィルトウにぶつけることなく交

差していった。

そして四本の熱線をいなした後にストレイドが見たのは、無防備な月輪である。圧倒的な速度のヴィルトウは、月輪へ肉薄する。

獣がコクピットの中で、嗤った。

ネオニダスの目前で大きな口を開けたのは、獣ではなく背部のミサイルコンテナだ。咆哮の代わりに吐き出されたものは、レーザーミサイル。

月輪が動き出す暇さえなかった。

慣性の法則に従って凄まじい速度のまま月輪に直撃したレーザーミサイルは、PAなしの機体を容赦なく蝕む。トールス自慢のソルディオスコアが無残な形に抉られ、焼かれ、切り裂かれていった。

それでも機能を停止せず、未だに戦闘を継続できたこの機体と、コクピットまで届く衝撃とコアを抉られた感覚がAMSから直接流れてきてもまだ戦い続けようとするネオニダスは確かに真の戦士だ。だが、獣はそのような人間の姿に心を打たれるようなことはない。

一瞬ヴィルトウの姿を見失ったネオニダスは、自らの背中に衝撃を感じた。レーダーの敵反応は、自機と重なっている。これが意味することは一つだ。

「背後に取り付かれたか!? しまっ……」

老兵がそう理解した時。ヴィルトウは月輪のコアに密着させた銃

口から鋼鉄の爪を発射していた。

白銀の鎧を、無慈悲な徹甲弾が突き破っていく。

鈍い音は、装甲がひしゃげてずたずたにされていく音だ。

2発。4発。8発。16発と、ライフルから吐き出された徹甲弾の数は増えていく。月輪の体は狂ったように痙攣し、両腕に握っていた武装は制御不能になったマニピュレータから離れていった。

ブースタの暴発か。それとも搭乗者とAMSの接続に障害が起ったのか。月輪のメインブースタからプラズマと化したコンデンサ内のエネルギーが吹き出てくる。断末魔の叫びのようなエネルギーの噴出によって、加速した機体が地面へと落下していく。

墜落。いや、撃墜というべきか。

結局何発の徹甲弾を撃ち込まれたのだろうか。月輪は最早ぴくりとも動かなくなっていた。最強の兵器が、今や鉄屑となって横たわっている。

対して老兵を紅い眼で無感動に見下ろす獣は、月輪から吐き出されたブースタの噴射炎によってその装甲の所々が焼け焦げてはいるものの、ほぼ無傷であった。

メルツエルが何度呼びかけても、老兵はあの特徴的な気怠い声を返しては来ない。それが意味することは一つだろう。

戦友を弔う暇もなく、戦場は動く。オープニングのレーダーに、敵機反応である赤色のマークに向かって近づいていく、味方色を示

す緑色のマークがあったのだ。

真改である。

メルツエルが見れば、そこには再びヴィルトウの後ろを取ったスプリットムーンが、右腕を構えて突撃しているところだった。いつでも抜刀からの斬撃が繰り出せる体勢だ。

先程の攻撃の影響で、両肩の追加ブースタとマシンガンは使い物にならない状態だ。ただそれが無くとも、剣士は圧倒的な速度で獣に迫る。

「……終止……」

深刻なダメージを負いながらも、剣士はその太刀を振るった。

獣は真改に気づき、アサルトライフルの掃射で応戦するも、既に剣士の間合いである。そして、ヴィルトウのPAは未だ回復していない。それはアサルトアーマーを使用できないということの意味していた。

アサルトアーマーが使えない、それ故の突撃だろうか。答えは否である。例えどのような攻撃手段を取られようとも、自らの太刀と戦い様に疑問を抱くことがない。真改とはそういう男だった。メルツエルはそれをよく理解している。

真改の唯一にして最大の武器である太刀が、再度不気味な輝きと共に唸り始めた。

しかし、獣に向けて振り切られた紫の刀身が、突然幻の様にかき

消えてしまった。剣士の右腕は、獣の目前で空を切る。その肘から先は消え去っていた。

遅れて地面に転がっていったのは、スプリットムーンの右腕である。その肘と接続されていた関節部分は、無残にも破壊されていた。ヴィルトウが右腕肘関節を狙って、アサルトライフルの掃射を浴びせたのだ。

アサルトライフルの銃口から立ちこめる硝煙を前に、獣の拳は右腕のライフル離す。重力に従ってゆっくりと地面へ落下するアサルトライフルの代わりに現れたのは、格納されていたブレードである。

「……無念……」

自らの右腕を見つめながら、真改は最期の言葉を呟くこととなった。

歴戦の戦士、と言うにはあまりにも線の細いテルミドールに、言わなくてはならないことがあった。蒼い瞳の青年はいつも通りの落ち着いた口調で語りかける。その内容に、テルミドールは眉を吊り上げながら彼に振り向いた。

「……『セラフィム』が、か？」

「ああ、組織内で過激な一派が幅を利かせてきているらしい。元が過激な組織だけに、その一派の主張も受け入れられやすいのだろう」

「理想を掲げる者は尊敬すべき者だ。だが、あの理想は頂けないな。それは……怨念のようなものだ」

理想主義者という評価を覆そうともしない目前の革命家が、端正な顔立ちを嫌悪の形に歪めている。理想家故に、潔癖でもあるのだ。

「セラフイムの方針は未だにORCA支援で動かない。だが、その一派がこれからも勢力を伸ばすようなら、今後どうなるかはわからないな。必要なら、肅清が起こるかもしれん」

「まったく。私がラインアークから帰ってきた途端にこれだ。どうしてこうも、人間というのは自滅したがるものかね」

紅と黒。革命に必要な鮮血と陰謀を表したような機体、『アンサンブ』のコックピットから整備場の床へテルミドールが降り立つ。耳にかかった髪をかき上げながら自らの分身を見上げる男は、仮面を被っていた時代によくしていたように、唇を吊り上げて笑いの表情を作っている。それは、嘲りの意味が籠もる笑いだ。

「荒唐無稽な理想ではあるが……危険なことに変わりはない。お前も、十分注意しておけ」

メルツェルは開いていた分厚いファイルを閉じると、じっとテルミドールに目を向ける。また小うるさい説教が始まった、と肩をすくめるだけで返事をしていたテルミドールだったが、メルツェルのその様子に気づくと貼り付けていた笑いを取り払った。

「メルツエル、お前は私の頭脳だ。言葉の出し惜しみはして欲しくないな」

普通の人間なら歯が浮くような台詞。それが不思議と自然に思えてしまうのが、この男の妙なところだった。そして、そんな台詞を吐かれても眉一つも動かさないその相棒も、妙な男であることに間違いない。

最悪の反動家をしてその頭脳と言わしめた男は、冬を思わせる瞳をテルミドールに向けながら瞬きすら忘れたように佇んでいたが、彼を見返すテルミドールの熱っぽい瞳に根負けしたのが、軽く息を吐いてから話し始めた。

「……ストレイドだが。奴がその一派に荷担する可能性もある。そうなった場合、クロースプランの実現は厳しくなるだろう」

「メルツエル、私たちは理想に賛同する同士を集めてきた。何人も戦士達の中には、危険な思想を持つ人間もいる。だが、そんな人間がもし反旗を翻したとしても、それを打ち倒せなくて何がORCA旅団、何がテルミドールか？ 最高存在とはそういうものだろう？ オールドキングを引き入れたときも、同じことを言っただけだ」

メルツエルは答えない。時に互いをロマンチスト、陰険と罵り合うことがあれど、互いを最も信じているからこそ、今日まで戦ってくる事ができたのだ。その彼を前にして、メルツエルは何も言えなくなる。

テルミドールの表情は、強者特有の傲慢や、革命家気取りの熱っぽい昂揚も感じられない。ただメルツエルを見つめている。その表情は、穏やかに笑ってさえいた。

だからこそだろうか。メルツエルが喉まで出かかる言葉を、言えないでいるのは。陰謀を巡らすときの冷徹さは何処かに消え去り、今のメルツエルは外見通りの線の細い青年に見えた。そんな彼の心情を理解できるとすれば、目の前にいるテルミドールだけだろう。

「……私が、ストレイドに負ける、と？」

僅かに顎を引くことが精一杯だ。その行為でさえ、今までの全ての行為を無にする裏切りにさえ感じられてしまう。だが、メルツエルには想像も付かないのだ。ストレイド、あの才能とセンス、そして揺るがない憎悪を持った存在が負ける姿が。

それでも、そんなメルツエルを見つけるテルミドールの眼は柔らかい。レイレナード、オーメル、ORCAと組織を渡り歩き、地獄と化した地上で戦い続けてきた男がする眼では無かった。

「……そうか。やはりお前もそう思うか」

ひどくあっさりとした表情で、革命家は語った。

「私も、奴に勝てるのかどうかわからん。茶番とは言え、アナトリアの傭兵と闘った時でさえこんなことは思わなかった。そうだな……正直、怖い」

穏やかに笑ったまま語るテルミドールに、「恐怖」の感情は見て取れない。だが、テルミドールが始めて口にする弱音に、メルツエルは酷く動揺していた。

「怖い？ ジャイアント・キリングをやったのけたときだって、お

前はそんなことは言わなかったのか？」

つい、過去の話を持ち出してしまふ。メルツエルには到底叶わない、ジャイアント・キリング。それをまるでやり飽きたアクション・ゲームをこなすように達成したテルミドールに、メルツエルは強い感情を抱いた。それは嫉妬か、憧憬か。本人にさえもわからない感情だったが、彼の理想に付き従う大きな要因になったことは間違いない。

そのテルミドールが、まるで「ただの人間のように」怯えているなど、メルツエルには到底理解できないことだった。

陰謀家の動かない表情から、彼らしからぬ動揺を見て取ったのか、テルミドールは可笑しそうに笑う。熱っぽい演説を始めたと思えば、冷め切った皮肉を並べ始め、そして今はまるで子供の様に笑う。本当に、テルミドールはわからない人間だった。

そして、笑いながら再びテルミドールはアンサングを見上げた。愛機を眺めるためか、それともメルツエルから視線を逸らすためだったのかは、わからない。

「私は、これまでずっと怖かった。様々なことに恐怖していた。それは戦士としてあるまじきことなのだろう。だがな……人類というもの、何かに恐怖しなければ何も生み出せない。幸いなことに、私は戦士を失職しても革命家になれる。革命家は、怖がる仕事が仕事なのさ」

「冗談のように語るテルミドールの顔に、今度は笑いが張り付いていなかった。

「グッ……」

コックピットまで届いた衝撃で、メルツェルは顔を顰める。対シヨック機構が存在するといっても限度があるのだ。脇腹の痛みからして、恐らく肋骨をやられたらしい。しかし、そんな事情を考慮してくれる相手ではない。再びメルツェルはその蒼い眼で周囲を見渡した。

視界に広がるのは、ただの荒野と、そして胴から真っ二つにされた戦友の姿だった。光を失った頭部のメインカメラが、メルツェルの戦いを眺めている。

戦友の死を悼む暇は無い。後方へと視界を転じようとすると、オープンニングの右半身に徹甲弾が突き刺さる。クイックブーストを使用しその場で回転、射手　ヴィルトウの姿をなんとか視界に捉えようとしますが、オープンニングが回転したときには既にヴィルトウの姿は無く、再び側面から徹甲弾がオープンニングの腕部装甲を貫こうと襲いかかってくる。

典型的な張り付き戦闘だ。それこそ教本に載せて良いほどの理想的な形。重量機の搭載する重火器の射戦に入らず、一方のみが相手を視界に捉え続ける。もつとも確実に安全な罅り殺しの形とも言える。

ネオニダス、真改をあつさりと屠ったストレイドは、オープニングとの一対一となった。だが、派手な突撃をせずにライフルとミサイルのみで地道にオープニングを追い詰めている。重装甲のオープニングも、継続的なダメージによって限界が近い。

「ハア……ハア……」

メルツエルがコックピットの中で吐く呼吸もかなり荒いものになってきていた。もともと高いAMSを保有していない彼にとって、継続的に攻撃を浴びせ続けられ、それに対応しようと機体を振り回すことは大きな負担だった。彼の限界も近い。

対するストレイドは、ネクスト2機を撃破した後だというのに、その動きは衰えるところを知らない。甘くはないはずのメルツエルの機体操作を上回る速度と読みで、オープニングの正面から外れ続けている。

それは芸術のように、美しい。

「……ここまでか。だが、一矢報いねば奴らに顔向けできん」

倒れていった戦友の顔が浮かんでいく。ネオニダス、真改、ジュリアス。そして……テルミドール。最も付き合いが長く、そして癖のある同士の顔が浮かんだ。

「見ている。これが私の最後の戦だ」

蒼い瞳に、炎が宿る。

体と機体は、もう悲鳴を上げていた。体内から込み上げてきたも

のが危うく口から吐き出されそうになるが、それを気力だけで堪え機体の操作に集中する。視界には決して入ってこないヴィルトウをレーザー上で確認し、その方向へと機体を旋回。さらにライフルの弾雨をかいくぐるために細かく左右前後に動きながらの索敵だ。

風を切ってオープニングの巨体が跳躍する度に肋骨が内部で暴れ激痛を発し、そして脳に不快感が蓄積していく。

「……ッ」

歯を食いしばるしか、それに耐える方法は無い。

だが現実は無情だ。回避行動と索敵行動が合わさった教本通りの動きは、完全に読まれ、そして無力だった。オープニングが右へ旋回すればヴィルトウは左へ、上を向けば下へと移動している。そしてその間にヴィルトウからの攻撃は止むことがないのだ。

短い警告音が統合制御体から発せられた。PA整波装置の損傷とそれに伴うPA整波能力の低下を通知する内容だ。整波装置の破損は既に3つめであり、そのたびにオープニングの防御力は低下していく。

敵を捉えることができず、そして確実にこちらの損傷は増えていく。このままではメルツェルの死は明らかである。

だが、策士は死を覚悟こそすれ、諦観には至っていない。身を蝕む不快感と弾雨に晒されながらも、メルツェルはまだチャンスを待っていた。自分の命すら投げ打って戦おうとする者の眼は、ただただ蒼い。

その瞳、現実には巨大なオープニングのカメラアイに、徹甲弾が突き刺さる。メルツエルはAMSによるフィードバックで自らの眼が潰される錯覚を味わったが、それでも怯まず獣との戦いを続ける。

「……貴様らでは、人類は救えない」

一方的な戦いの中、メルツエルに感情を感じさせぬ機械のような声が聞こえてきた。オープニングに向けての通信だ。メルツエルは起伏のないその声に、不思議と懐かしさを感じた。

ストレイドは無口な男だ。短い間とはいえ共に戦ったメルツエルも、彼の声を聞いたことは少ない。まして戦闘中となれば尚更だ。ではなぜ、この男は今になってメルツエルに語りかけてきたのだろうか。

「君なら救えるのか？ ただの復讐を人類救済に置き換えているだけではないのかね？」

閃光と見紛う速度で、オープニングの右側面にヴィルトゥは回り込む。緋色の噴射炎は、まるで炎の尾である。

「……掃射砲を使ったところで、人類は救われない。新天地を得ても、そこで壊死するだけだ」

淡々と聞こえてくる機械的な声を最後まで聞く前に、メルツエルが迎撃の為にヴィルトゥへとGA製のライフルを掲げる。だがAMSからの命令で引き金を引くはずだった腕はだらりと垂れ下がってしまう。放たれたアサルトライフルの徹甲弾がオープニングの右肘関節を正確に射貫いたのだ。アクチュエータを破壊され、オープニングは長い銃身のライフルを取り落とししまった。

「我々は企業の罪を清算し、人類を次の段階へ導こうとしている…
…！ 滅亡を招き寄せる君こそ人類の敵だろう」

整波装置の一つが音を立てて吹き飛び、環流しているコジマ粒子の流れが乱れていく。弱まったPAの外から、獣は精確にその穴に弾丸を叩き込んできた。装甲は悲鳴を上げながら無残に形を変える。

「貴様らでは清算できない。… 全てを根絶しない限り、人類に未来は無い」

平板な音声が、突如として薄暗い濁ったものになる。思わず走った悪寒は、メルツェルの防衛本能なのだろうか。

オープニングの頭上をヴィルトウが交差した、そう理解したときには、既にオープニングの目前でレーザーミサイルの信管が作動していた。巨大なミサイルは熱の奔流へと姿を変え、弱まったPAを打ち消しオープニングに襲いかかる。

爆発音と一緒に、メルツェルの体内で骨が軋み、折れ、砕ける音がした。腹の底から混み上がってくるモノを口からぶちまけ、メルツェルは窒息しそうになる。血か、吐瀉物か、最早何もわからない。

致命打だった。オープニングの右腕は原型を留めぬほど破壊されている。背中に背負っていたグレネードキャノンは消し飛び、右足に至ってはアクチュエータごと焼き払われ、片膝を付いてようやくバランスを保っている有様だった。間違いなく、致命打である。

「死ぬ。貴様らを殺し、人類を殺して、俺は……」

オープニングの背後、白い鎧を纏った一匹の獣が牙を剥く。不気味な燐光を放つ牙は、右腕に搭載されたレーザーブレード。

そして獣は、満身創痍の狩人の背中に向かって跳躍した。

「俺は……人類種を救う」

構えた右腕は、オープニングを両断するためのもの。燐光は閃光に変わり、研ぎ澄まされたエネルギーの刃が狩人に迫る。

「……まだまだ！」

だが狩人はまだ諦めていなかった。オープニングは片膝を付いたままコンデンサからエネルギーを放出し、サイドブースタから噴射する。機体各所のブースタを細かく使って行われるクイックターンだ。ラージミサイルの直撃で幾つかのブースタはただ火花を散らすだけに終わり、鋼鉄の巨人は旋回しながら地面に倒れ、無様な姿を晒す。

A M Sを通じて発せられた命令に従い、オープニングの背中のミサイルコンテナが開かれ、ラージミサイルが発射される。

だがクイックターンの直後、ロックオンの終了されないうまま発射されたラージミサイルは大きく目標を逸れ、遙か天空へ向かう進路を取っていた。これでは獣に掠りもしない。

音速を突破して迫る獣の牙は、赤光に染まりながらメルツェルに迫っている。構えた右腕が、遂に必殺の一撃を放った。

「喰らえ……」

メルツエルはAMSから最後の命令を出す。FCSが最速で切り替えた武装　GA製のライフルの照準は、先程放ったレーザーミサイルを捉えている。

自爆攻撃だ。例えレーザーブレードがオープニングを両断しても、メルツエルの執念の一撃はアサルトアーマーの影響でプライマルアーマーの無いヴィルトウには、致命打になる。一撃必殺の銀シルバーの弾丸だ。

獣が右腕を振るい、赤光がオープニングを切り裂く。鋼鉄の巨人が焼き切れていく不快な断末魔を耳にしながら、メルツエルも引き金を引いた。

だが、放たれるはずの弾丸は、銃口に収まったままだ。

「ッ！……やはり貴様は、違うな」

思わず漏れたのは、狩人の眩き。オープニングを切り裂いたレーザーブレード、それはオープニングのコアではなく左腕を切り裂いていたのだ。

重い音を立て、長い銃身ごと左腕が落ちた。

獣の左腕には、新たに現れた二つ目のレーザーブレード。

万策尽きた狩人の目前で、獣が左腕を掲げた。

腹が暖かい。薄暗いコックピットの中で感じる暖かさは、それだけだった。

四肢は、冷たかった。もう血が通っていないのだろう。動かすことはできない。

ただぐるぐると、取り留めもなく、メルツェルは考えていた。感じていた。

獣は去っていた。骸と化した獲物に興味を無くしたのだろうか。次の獲物を求めて何処かへ去っていった。

「テルミドール、俺は……」

死んだ戦友の顔が浮かんでくる。あのとき、アンサングを見上げながら彼が言っていたことを思い出す。

あのときは理解できなかったことが、今になってすんなりと理解できていた。倒れていったORCAの戦士も、同じようなことを思ったのかもしれない。

革命のために。理想のために。闘って、戦って、そして斃れた。

斃れた今、メルツェルは感じていた。かつて無いほどに、感じていた。

「俺は……怖い」

恐怖だ。メルツェルは今、紛れもない恐怖を感じていた。

「ここまでなのか……俺は。ORCAは……」

致命傷だと、考えなくてもわかる。メルツェルはもうすぐ死ぬ。それがたまたまなく怖かった。

「テルミドル。解ったぞ。ようやく解った。お前も怖かったのか」

蒼い瞳が恐怖に揺れる。システムが起動せず、完全な暗闇となったコックピットの中で、メルツェルの蒼い瞳が仄かに最後の輝きを放っている。

「俺も怖い。テルミドル、そうか解ったぞ」

彼らしくも無く、感情的に言葉が放たれる。理性の外で構築された言葉を、暗闇だけが聞いていた。

「……俺も怖いんだ。そう、何も出来ずに死ぬのが怖い」

恐怖とは、臆病者だけが感じるものなのだろうか。

「世界はどうなる？ アサルトセルは？ 地上の汚染は？ クロースプランを、俺達の理想を……果たせぬまま死ぬのが怖い」

世界の行く末に恐怖することは、臆病だろうか。恐怖を感じぬ革命家はいないのだ。恐怖を抱かなければ、人は成長を止め、静かに壊死していく。

テルミドールの恐怖、その意味を知ったメルツェルは暗闇だけが
見守る中、ガタガタと震え続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8176y/>

ARMORED CORE HIS ANSWER

2012年1月2日02時52分発行